

第24期考古学セミナー（2022年度）

—最上地域の縄文時代—

第1回講座

講義②

最上地域の縄文時代中期前葉から中葉の
遺構と遺物

(公財) 山形県埋蔵文化財センター

菅原 哲文 氏

令和4年9月25日（日）

会場 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館研修室

最上地域の縄文時代中期前葉から中葉の遺構と遺物

菅原哲文

1 はじめに

山形県北部の最上地域には新庄盆地が広がり、盆地の南端を最上川が西流する。最上川には小国川、泉田川、鮭川をはじめとした河川が合流し、河川沿いには縄文時代中期の数多くの遺跡が認められる（第1図）。

特に著名なのは、国宝土偶「縄文の女神」が出土した舟形町西ノ前遺跡で、小国川の河岸段丘上に立地する。小国川のさらに上流に向かうと向町盆地に入り、最上町の水木田遺跡が所在する。当遺跡の縄文土器を中心とする出土遺物は、国の重要文化財に指定された。新庄盆地の泉田川沿いには、中期前葉から中葉にかけての拠点集落跡であった中川原C遺跡がある。

このように、当地域の縄文時代中期前半には、発掘調査で内容が明らかになった大規模集落跡があり、華やかな縄文土器、発達した土偶が認められる。以下、主な3遺跡をあげてその内容を述べたい。

2 主な遺跡と遺構・遺物

最上地域の主な縄文時代中期前半の3遺跡をとりあげ、遺跡の内容、遺構、遺物についての概要を述べたい。

(1) 舟形町西ノ前遺跡

最上郡舟形町舟形西ノ前に所在する。小国川左岸の舌状に張り出した標高72mの河岸段丘上に立地する。一般国道13号尾花沢新庄道路改築工事により、平成4年に山形県教育委員会により4450㎡が調査され、約900箱の遺物が出土した。整理作業・報告書刊行は山形県埋蔵文化財センターにより行われた（黒坂1994）。

調査では、大木8a式期を中心とした集落跡が明らかになった。

竪穴住居跡

竪穴住居跡は合計9棟が検出された。住居跡は調査区西側の段丘縁辺に沿って列状に配置される（第2図）。

住居跡は、楕円形や長方形のプランで長い長軸をもち、10m超の大型住居跡となるタイプのもので、小型の方形プランとなるものが認められる。

大型住居跡であるST9住居跡群は、ST9c・d・e・gの4棟の竪穴住居跡がある。西端は段丘縁辺の崩落により失われている。規模は、長軸6～9m以上、短軸4～6.2mである。時期は大木8a式を中心とする時期とされる。いずれも同じ地点に何度も建て替えられたと考えられ、柱穴の重複が顕著である。ST9dには炉跡は確認されていない。ST9eは3基の地床炉と石囲炉を備える。ST9gは石囲炉が3基検出された。

ST34住居跡は大木8b式期である。他の住居跡と場所や長軸の向きを異にする。長軸11m、短軸4.8mの長方形プランである。やはり柱穴の重複が著しい。

ST96住居跡は長軸7.6m、短軸4.8mの長方形プランである。長軸の向きはST34と類似する。地床炉2基が検出されている。大木8a式期の遺物が主体である。土坑

60基以上のフラスコ状土坑が確認された。フラスコ状土坑は、主に貯蔵穴としての機能が想定される。大型住居跡が構築されるよりも内側に分布する。口径は1～1.5m、底径1.4～1.6m、確認面からの深さ1.5～1.8mのものが多い。大型ものは底径2.4m、深さ2mに及ぶ。

捨て場（SX261）

自然地形と考えられる東西36m、幅7.5～14mにわたる沢状の落ち込みに約750箱の縄文土器、石器が廃棄されていた。深さは中央部で2mに及ぶ。廃棄された土器は、大木7a、7b、8a、8b式にわたる。大木7b～8a式土器が最も多い。その他、土偶をはじめとした土製品、石器、石製品も多く出土している。大型土偶である「縄文の女神」も、この捨て場内から出土した。

なお補足であるが、平成26年に山形県により遺跡の東半分について範囲確認調査が実施された。残存する東側についても土坑・柱穴が検出され、西側と同様に集落域が広がることが確認された（長橋ほか2014）。

出土遺物・縄文土器

I群土器（大木7a式～7b式初期）は、SX261を中心に若干出土している。竹管文、交互刺突文、折り返し

最上地域の縄文時代中期前葉から中葉の遺構と遺物

菅原哲文

1 はじめに

山形県北部の最上地域には新庄盆地が広がり、盆地の南端を最上川が西流する。最上川には小国川、泉田川、鮭川をはじめとした河川が合流し、河川沿いには縄文時代中期の数多くの遺跡が認められる（第1図）。

特に著名なのは、国宝土偶「縄文の女神」が出土した舟形町西ノ前遺跡で、小国川の河岸段丘上に立地する。小国川のさらに上流に向かうと向町盆地に入り、最上町の水木田遺跡が所在する。当遺跡の縄文土器を中心とする出土遺物は、国の重要文化財に指定された。新庄盆地の泉田川沿いには、中期前葉から中葉にかけての拠点集落跡であった中川原C遺跡がある。

このように、当地域の縄文時代中期前半には、発掘調査で内容が明らかになった大規模集落跡があり、華やかな縄文土器、発達した土偶が認められる。以下、主な3遺跡をあげてその内容を述べたい。

2 主な遺跡と遺構・遺物

最上地域の主な縄文時代中期前半の3遺跡をとりあげ、遺跡の内容、遺構、遺物についての概要を述べたい。

(1) 舟形町西ノ前遺跡

最上郡舟形町舟形西ノ前に所在する。小国川左岸の舌状に張り出した標高72mの河岸段丘上に立地する。一般国道13号尾花沢新庄道路改築工事により、平成4年に山形県教育委員会により4450㎡が調査され、約900箱の遺物が出土した。整理作業・報告書刊行は山形県埋蔵文化財センターにより行われた（黒坂1994）。

調査では、大木8a式期を中心とした集落跡が明らかになった。

竪穴住居跡

竪穴住居跡は合計9棟が検出された。住居跡は調査区西側の段丘縁辺に沿って列状に配置される（第2図）。

住居跡は、楕円形や長方形のプランで長い長軸をもち、10m超の大型住居跡となるタイプのもものと、小型の方形プランとなるものが認められる。

大型住居跡であるST9住居跡群は、ST9c・d・e・gの4棟の竪穴住居跡がある。西端は段丘縁辺の崩落により失われている。規模は、長軸6～9m以上、短軸4～6.2mである。時期は大木8a式を中心とする時期とされる。いずれも同じ地点に何度も建て替えられたと考えられ、柱穴の重複が顕著である。ST9dには炉跡は確認されていない。ST9eは3基の地床炉と石囲炉を備える。ST9gは石囲炉が3基検出された。

ST34住居跡は大木8b式期である。他の住居跡と場所や長軸の向きを異にする。長軸11m、短軸4.8mの長方形プランである。やはり柱穴の重複が著しい。

ST96住居跡は長軸7.6m、短軸4.8mの長方形プランである。長軸の向きはST34と類似する。地床炉2基が検出されている。大木8a式期の遺物が主体である。土坑

60基以上のフラスコ状土坑が確認された。フラスコ状土坑は、主に貯蔵穴としての機能が想定される。大型住居跡が構築されるよりも内側に分布する。口径は1～1.5m、底径1.4～1.6m、確認面からの深さ1.5～1.8mのものが多い。大型ものは底径2.4m、深さ2mに及ぶ。

捨て場（SX261）

自然地形と考えられる東西36m、幅7.5～14mにわたる沢状の落ち込みに約750箱の縄文土器、石器が廃棄されていた。深さは中央部で2mに及ぶ。廃棄された土器は、大木7a、7b、8a、8b式にわたる。大木7b～8a式土器が最も多い。その他、土偶をはじめとした土製品、石器、石製品も多く出土している。大型土偶である「縄文の女神」も、この捨て場内から出土した。

なお補足であるが、平成26年に山形県により遺跡の東半分について範囲確認調査が実施された。残存する東側についても土坑・柱穴が検出され、西側と同様に集落域が広がることが確認された（長橋ほか2014）。

出土遺物・縄文土器

I群土器（大木7a式～7b式初期）は、SX261を中心に若干出土している。竹管文、交互刺突文、折り返し

口縁などが認められる。

Ⅱ群土器（大木 7b 式土器）は、SX261 からまとまった数量が出土している。大型の長胴となる深鉢は、大波状口縁と平縁のものが認められ、口縁部の文様には押圧縄文や沈線による弧状を主とした文様が施される。浅鉢も種々のサイズがありバリエーションに富む。

Ⅳ群土器（大木 8a 式土器）は、SX261 内と集落域から大量に出土している。S 字状の突起やキャリパー形の器形が多い。古い段階から新しい段階まで認められる。

Ⅴ群土器（大木 8b 式土器）は、集落域を主として出土している。図示資料は少ない。古・中段階のものであり、新しい時期のものは報告されていない。

その他、Ⅲ群土器として、北陸の新崎式土器の出土が報告されている。円筒上層式土器は報告されていない。

土偶・土製品

土偶は 46 点出土しており、国宝に指定されている。大木 7a～8b 式期に伴うものと考えられる。特筆されるのは、接合し完全な形となった高さ 45cm の大型土偶である。自立し、板状の胴体と後ろに張り出しだ臀部、W 字状に胸が表現され、髪形の表現はあるが顔は表現されない。頭部に 8 箇所、両腕に 1 カ所ずつ、合計 10 箇所の穿孔がある。この形態の土偶は「西ノ前型式」と呼ばれている（阿部 1996）。

その他の土製品として、耳栓 10 点、管状土製品が 7 点以上、スプーン状土製品、スタンプ状土製品なども出土している。

石製品

石棒が 6 点報告されている。大型石棒の類が多い。無頭である。その他、無文の石冠、環状の石製品などが出土している。

(2) 中川原 C 遺跡

新庄市大字十日町字中川原に位置する。泉田川の河岸段丘上に立地し、遺跡範囲は東西 500m、南北 200 m に及ぶ。平成 11・12 年に山形県埋蔵文化財センターにより第 1～3 次調査が行われ、8,400 m²が調査された（佐竹 2002）。中期前半の遺構は A、B 区を中心に検出され（第 3 図）、約 1060 箱の遺物が出土している。また、平成 18 年に第 4 次調査が行われたが、この調査区は縄文後期の遺構分布が確認された（石井 2007）。

建物跡

建物跡と考えられる遺構が 22 棟確認された。報告書では、A～C 類に分類されている。A 類：1 間×数間の柱穴配置で縦長のプランとなるもの、B 類：4 本柱を一単位として有するもの、C 類：柱穴が円形・楕円形の配列を成すもの、となる。

A 類の SB12 は、長軸約 15 m、短軸約 3 m で 1×4 間の間取りをもつ。建物内の南側に寄った位置に、2 基の石囲炉が検出されている。遺構検出面は当時の生活面より大分下がった位置であるため、掘り込みをもつ竪穴式であった可能性も考えられる。炉の存在より住居跡と推測される。同様な建物 SB 5、6 は調査時に炉跡は検出されていないが、同じであろう。

B 類は、一辺が 2～4.6m の建物跡であるが、規模から考えて居住施設にはならず、倉庫的な役割もしくは別の用途も想定される。柱穴の規模や深さは大きく深い。A 群とは分布場所を異にしている。SB 4 の柱穴に、大木 7b 式新段階と思われる土器が廃棄されていた。

C 類は、19 棟以上が存在した可能性がある。B 区南西部ピット群、B 区中央部ピット群、A 区西側ピット群、A 区西側ピット群は、柱穴が密集して検出された地点であり、円形プランの直径 5～6 m ほどの建物跡が複数切りあって検出された。建物跡の掘り込みは確認されないが、地床炉や石囲炉が認められる。またこのエリアからは比較的多くの土器が出土する。

埋設土器

35 基が検出された。A 区西半から B 区北半にかけて分布の集中が認められる。本来の埋設遺構の掘り込み面から 30～50cm 削平されており、土器は体部下半から底部近くの部位しか残存していない。リン・カルシウム分析により、周囲の土壌より土器内部の土壌の方がリン・カルシウムの濃度が高い事が報告されており、墓としての機能が推測されると報告されている。文様で型式が判別できるものは大木 8a 式が多い。

土坑

浅い掘り込みをもつ 1 類、小型で袋状を成すⅡ類が中期の集落に伴うものである。Ⅰ類は、廃棄土坑と考えられ、大木 8a 式土器が出土している。Ⅱ類は規模からすると貯蔵穴にはならないものと思われる。

捨て場

A区SX126遺物集中域、B区SX101が確認された。SX126は大木8a式期で、8a式期の新しい時期のものも認められる。SX101は大木7b～8a式期である。最下層では、大木7b式期の新しい時期の一括資料が出土した。

縄文土器

(a) 大木7b式土器

第1群土器(大木7b式古段階)は、SX7B区中央ピット群遺物集中域から比較的まとまって出土した。深鉢は4単位の大波状口縁で、波頂部は花卉状に装飾される。口縁部は沈線による区画文が主で、体部は縄文のみ、縦方向の結節回転文が認められる。長胴となる。第2群土器(大木7b式新段階)は、B区SX101最下層、B区中央ピット群遺物集中域SX7からもまとまって出土している。外反する口縁部になるものと内湾するキャリパー状になる口縁のものがあり、押圧縄文による文様や、波状の隆帯を貼り付け、隆帯上に連続して縦に縄文を押圧するものが多い。

(b) 大木8a式土器

第3群土器(大木8a式土器古段階)は、SX126A区中央捨て場、大型建物跡周辺、B区4本柱建物跡柱穴中より出土した。キャリパー形の器形と外反する器形が見られ、口縁部にはS字状の突起が付される。縦方向の連続した押圧縄文も認められる。第4群土器(大木8a式新段階)はSX126A区中央捨て場で出土する。出土量は前段階よりかなり少ない。口縁部突起がない平縁のものも多く、小型のキャリパー形土器の頻度が多い。

県南部の土器と比較して長胴形の器形が多く、装飾がそれほど煩雑でないものが多い。

土偶と土製品

土偶は41点出土した。大木7b～8a式期の時期とみなされる。西ノ前型式になるものである。面相が表現されないタイプと表現されるタイプがある。頭頂部が小型の円盤状で平坦となる土偶は7b式期に伴うと考えられる。面相が表現されるものは、頭部に複数の穿孔が見られ新しい様相を示すと思われる。大木8a期に伴うものであろう。その他、耳栓形の耳飾などが出土している。

石製品

石棒、石冠が出土している。石棒は5点出土しており、全体の形状がわかるものは、長さ30cm台の棒状の自

然礫を利用している。いずれも無頭の石棒になると考えられる。石冠は4点出土した。無文のものが3点、渦巻文などの文様が施されるものがある。

(3) 水木田遺跡

最上町大字月楯字水木田、字畑中、字清水下に所在する。向町盆地内にあり、小国川の河岸段丘上に立地する。東西350m、南北250mの広がりをもつ。標高は186～188m前後を測る。

昭和53年に県営圃場整備事業(最上町中部地区)により、山形県教育委員会が主体となり、最上町教育委員会の協力を得て調査が行われた。調査は、2×10m、4×800mのトレンチを遺跡内に入れ、遺物・遺構の集中地点はグリッドを拡張し調査が行われている(第4図)。確認された縄文時代中期の遺構は、竪穴住居跡8棟(ST17・ST101～124)、土坑、集石遺構(SM7・8)、配石遺構(SM201)、性格不明遺構(落ち込み)、その他平安時代の遺構も確認されている。約1000箱の遺物が出土している(阿部ほか1984)。

竪穴住居跡

西区で確認されたST17は直径5.6mの略円形の平面形で、地床炉を備える。炉の周囲から、大型土偶と土器が出土している。住居内からは埋甕と推定される土器が出土した。床面出土の土器や埋甕の土器より、大木7b式期の住居跡と考えられる。

東区では、7棟の竪穴住居跡が確認されている。時期が判明している住居については大木8a式期である。規模は、直径3.3～7.8mの小・中型の住居跡である。ST104は地床炉を備えている。ST101からは大木8a式の大型深鉢が出土している。

集石遺構・配石遺構

SM7・8集石遺構は、西区の土器廃棄群中に確認された。SM7は平面形は楕円形、74×53cmの広がりをもち、下には土坑の存在が予測される。SM8は63×60cmの広がりをもつ。集石下6×14cmの間に薄い焼土層があると報告される。どちらも大きさ20cm未満の円礫を用いていると思われる。

SM201配石遺構は、中央区で検出された。方形の浅い掘り込み内の壁面に沿って、細長い礫を中心に、全体として隅丸方形もしくは弧状の配置をとる。規模は、最

大径8m、最小径6.7mを測る。土器・石器、祭祀関係の遺物が出土している。配石近辺で出土した土器は、大木7b式土器と推測され、凹石、磨石、石斧などの石器類、土偶の破片2点、石棒1点が出土している。

捨て場

西区のH-7区を中心に、大木7b式期間を中心とする大量の土器が廃棄された捨て場が確認された。短期間に一括廃棄されたと考えられ、東西方向に幅4m、長さ約16mにわたって検出された。東区でもJ-16区で同様の土器群が検出されている。大木8a式期と推測される。

縄文土器

大木7a・7b・8a式土器が出土しているが、特に大木7b式土器は豊富な内容である。

(a) 大木7a式土器

出土量は多くない。4単位の大波状口縁をもつ長胴の個体が主で、体部は無文や綾絡文を伴う縄文だけが施文される。口縁部文様には、波頂部から垂下する隆帯が見られ、隆帯上は押圧や刻目などが施される。また、交互刺突文や三角形の印刻文を施す五領ヶ台系の土器が認められる。

(b) 大木7b式土器

大波状口縁の長胴形の深鉢が特徴的で、波頂部に種々の装飾が施される。口縁部は区画され内部には沈線や交互刺突文による文様が描かれる。体部は縄文で縦の綾絡文が多い。その他、体部が膨らみ口縁部が短く外反する深鉢、口縁部が内湾する器形の深鉢などがある。押圧縄文による弧状や渦巻状、直線状の文様、隆帯による弧状や懸垂状の文様、交互刺突文なども認められる。C字状の突起が口縁上に付される。五領ヶ台系の土器もこの時期に伴う。また、北東北の円筒上層b式土器や、北陸の新崎式土器も破片が出土している。

(c) 大木8a式土器

報告では、住居跡を中心に出土が報告されているが、図示されている資料は少ない。高さ89cmの大型深鉢である大木8a式土器が出土している。口縁部を一周する透かし状の突起、口縁部や多段構成になる体部文様にはクランク文や波状文が施される。

土偶・土製品

土偶は35点出土した。うち25点は「西ノ前型式」

の土偶である(渋谷・齋藤2015)。頭部を欠くが以下は完全な形で出土した大型の土偶は、大木7b式期の住居跡から出土した。有節沈線文による渦巻状や弧状の文様が施される。当遺跡でも、頭頂部が平らで顔面の表現が省略されたカップ形土偶が見られる。面相が表現されるのは、大木8a式以降になると思われる。また、西ノ前型式ではない別系統と考えられる土偶も確認される。

土製品は耳飾、異形土製品、土製円板などが出土している。耳飾は、いずれも耳栓状となる。土製品の中には三脚土製品が1点認められる。主に山形盆地南部で多く出土するものであり、県北では出土が稀である。円盤状土製品には、中央に円孔をもち、沈線で同心円状の文様を施すものがある。

石製品

石棒、石冠が出土している。石棒は4点出土している。大型のものは長さ40cm以上直径10cm以上となる。破損品が多いが、無頭の石棒になるものと思われる。石冠は3点出土している。無文のものが主であるが、文様が施されるものは渦巻文が認められる。

3 まとめ

調査が行われた最上地域の大型集落を中心に遺構と遺物の内容を述べてきた。以下に中期前半における最上地域の遺構と遺物の特色等についてまとめておく。

遺構について

最上地域での中期前半の大規模集落では、楕円形・長方形の平面形となる大型住居跡を中心とした集落が形成される。その他、円形の小・中型の住居も同じ集落内部に認められる。この様相は、山形県内の他地域でも共通する。

中川原C遺跡では、4本柱構成となる建物跡が確認されたが、これらは居住施設にはならない別の性格の遺構と考えられる。

土坑では、西ノ前遺跡において、貯蔵穴と考えられるフラスコ状土坑が多数検出された。中期前半では、県内他遺跡でも大型のフラスコ状土坑が確認される。

墓と考えられる遺構として、土器埋設遺構があり中川原C遺跡で多数検出されている。他の2遺跡では検出されていないが、土器棺墓は共通的なあり方と考えられる。また、土壙墓も存在するものと思われるが、明確に

各遺跡で検出や報告は行われていない。

多量の遺物が出土する捨て場は、各遺跡とも確認され、遺物数量は数百箱以上に及ぶ。

遺物について

縄文土器は大木 7b 式・8a 式土器を中心に各遺跡から大量に出土し報告されている。大木 7b 式土器は水木田遺跡で優品が多く、重要文化財にも指定されている。東西南部の様相と比較して長胴となる器形が多く、装飾も南部よりは控えめな印象である。他地域からの影響として、水木田遺跡では五領ヶ台系の土器が散見されるが、この傾向は県内全般に見られる傾向である。その他、少量の北陸系の新崎式土器が認められる。水木田遺跡では円筒上層 b 式土器が出土しているが、中期の円筒上層式土器そのものが出土するのは稀である。ただし、中川原

C 遺跡では、円筒上層式土器の影響を受けたと推定される個体も認められる。

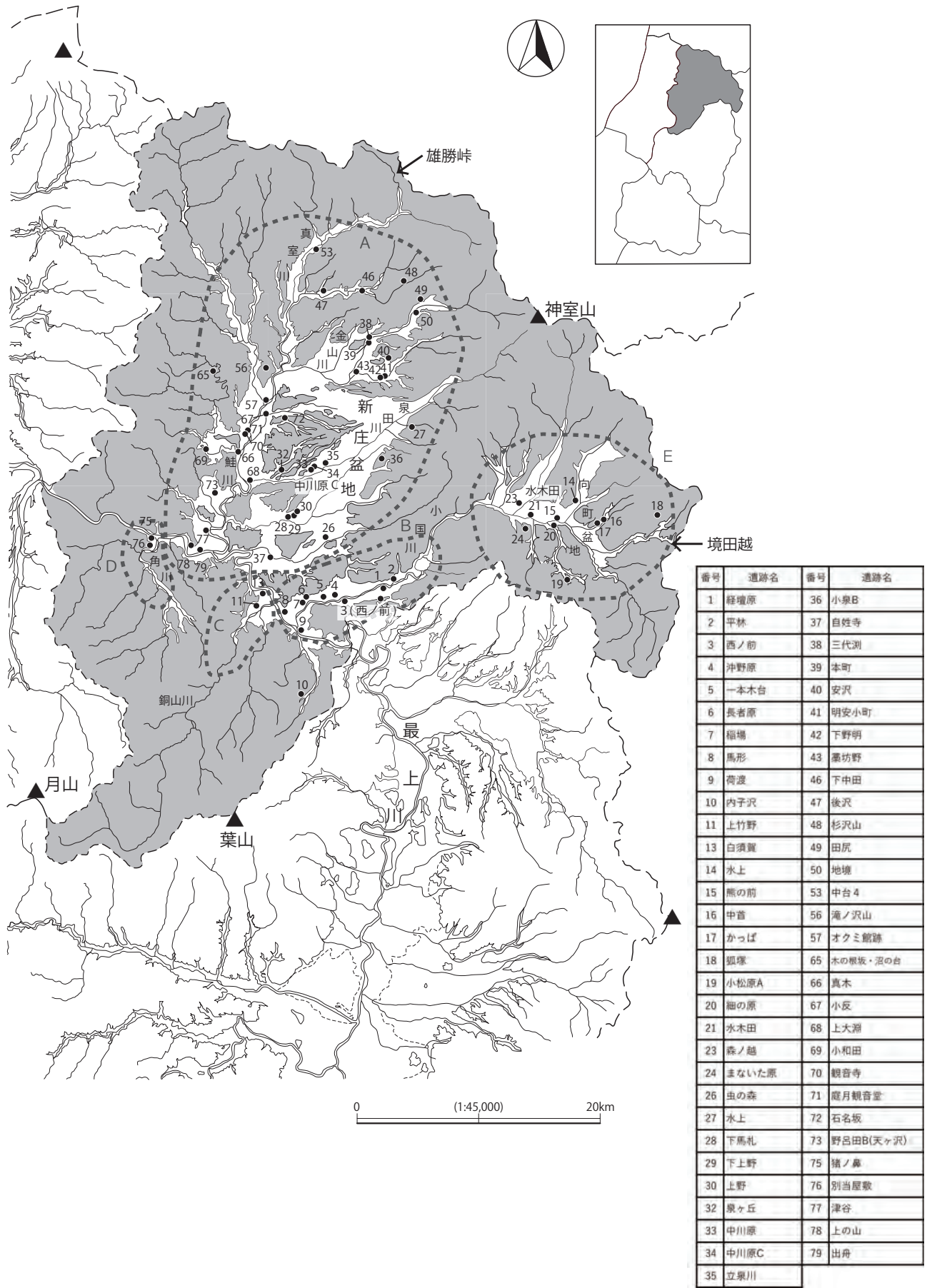
当地域を中心に、中期前半を中心として土偶は西ノ前型式と呼ばれる特徴的な形態の土偶が製作される。いずれも、大規模集落での捨て場を中心として出土が認められる。立像、長脚で板状の胴体、出尻形となる。山形盆地南部や米沢盆地では、三脚土製品や三脚石器など土偶に類する遺物と思われる遺物が発達するが、県北のこの地域は土偶に特化しているように思われる。

土偶以外の土製品のバリエーションは少ない。西ノ前遺跡では管状土製品が確認される。

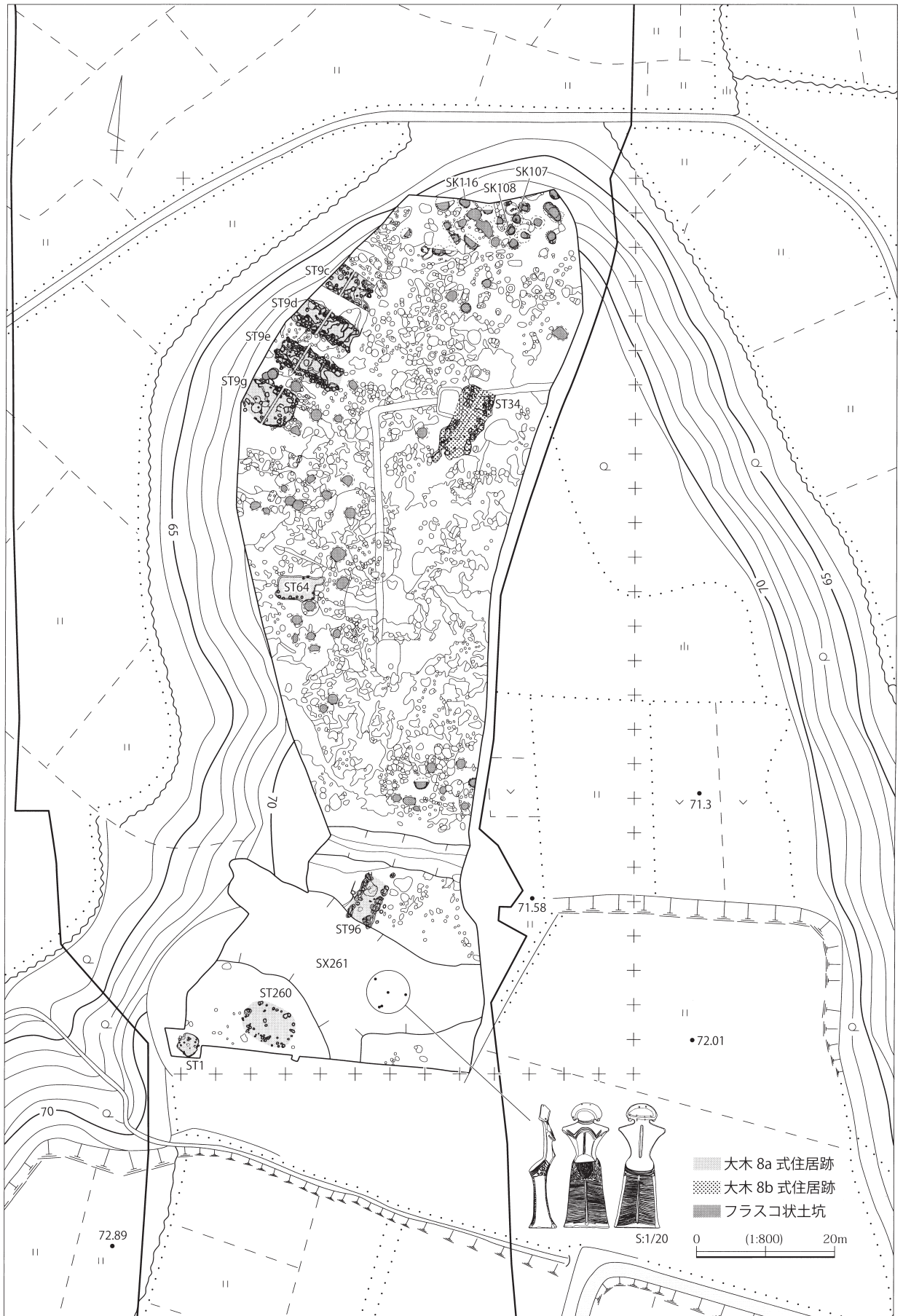
石製品の主なものとして石棒があるが、無頭の個体がほとんどで大型になる。その他、石冠の出土が各遺跡から確認される。

引用・参考文献

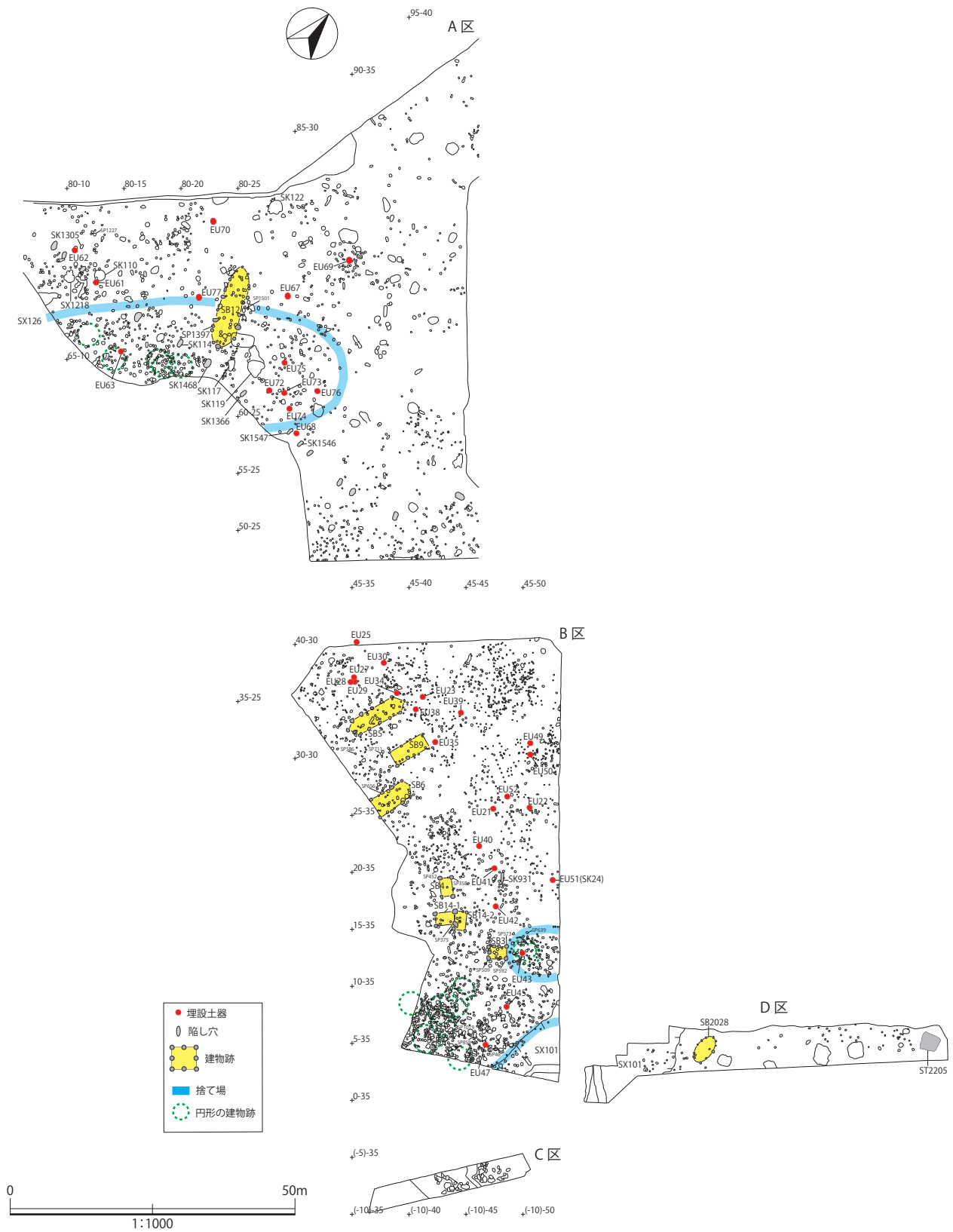
- 阿部明彦 1996 「中期大木式期の様相―西ノ前タイプ土偶の出現と展開―」『土偶シンポジウム 4 長野大会中部高地をとりまく中期の土偶シンポジウム発表要旨』土偶とその情報研究会
- 石井浩幸 2007 『中川原 C 遺跡第 4 次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 163 集
- 阿部明彦・佐々木洋治・佐藤正俊 1984 『水木田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 75 集
- 黒坂雅人 1994 『西ノ前遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 1 集
- 小林圭一 2019 「山形県北東部における縄文時代中期の遺跡動態―西海淵遺跡と西ノ前遺跡を中心として―」『研究紀要』第 11 号 (公財) 山形県埋蔵文化財センター
- 佐竹桂一 2002 『中川原 C 遺跡立泉川遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 98 集
- 渋谷孝雄・齋藤久美子 2015 『第 23 回企画展 重要文化財水木田遺跡展』山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
- 菅原哲文 2017 「最上川中・下流域における縄文時代中期から後期の遺跡分布」『研究紀要』第 9 号 pp.45-74
- 長橋至ほか 2014 『分布調査報告書 (40) 西ノ前遺跡確認調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 218 集
- 渋谷孝雄・伊藤純子 2020 『第 28 回企画展 水木田遺跡と縄文時代中期前半の山形』山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館



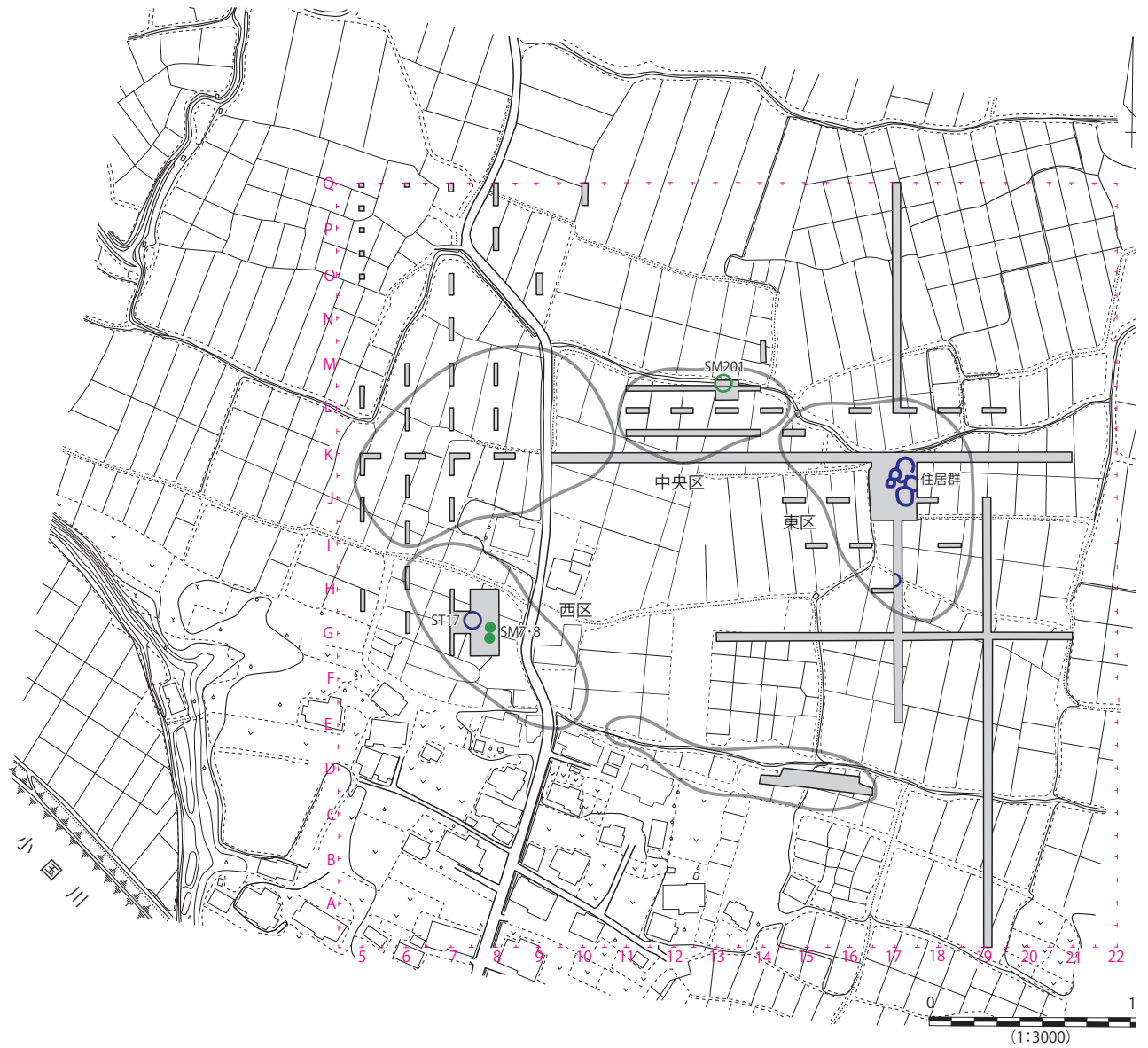
第1図 最上地方の縄文中期前半の遺跡分布図(菅原2017より作成)



第2図 西ノ前遺跡遺構配置図 (小林 2019 より)



第3図 中川原C遺跡遺構配置図 (佐竹 2002 より作成)



第4図 水木田遺跡調査区配置図（阿部ほか1984より作成）

最上地域の縄文時代中期前葉から中葉の遺構と遺物

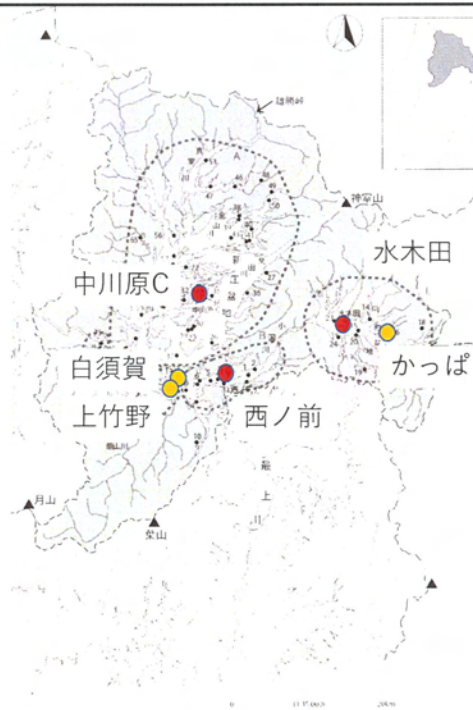


(公財) 山形県埋蔵文化財センター
菅原哲文

1

最上地域の主な縄文時代中期前半の遺跡

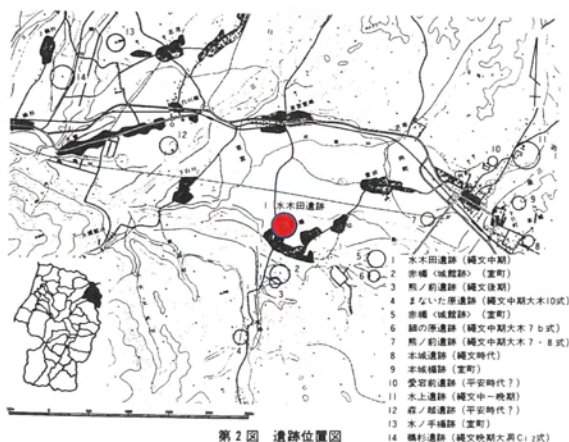
- ・最上町水木田遺跡・舟形町西ノ前遺跡
- ・新庄市中川原C遺跡



2

最上町水木田遺跡

- ・新庄盆地の東、向町盆地に位置し、小国川の河岸段丘上に立地。
- ・昭和53年に山形県教委による調査、1000箱に及ぶ遺物が出土。
- ・大木7a・7b・8a式期にわたる縄文土器、重要文化財に指定された。



3

水木田遺跡 遺跡の広がり



・西区

大木7b式期の遺構・住居跡・捨て場

・中央区

大木7b式期の遺構・配石遺構

・東区

大木8a式期の遺構・住居跡・捨て場

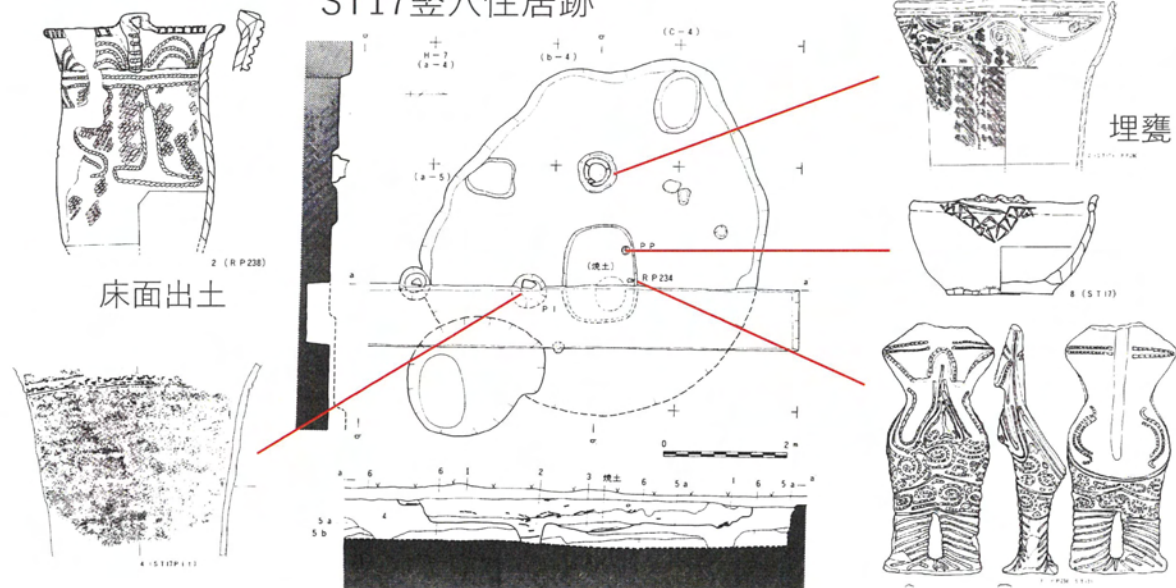


4

水木田遺跡 西区の竪穴住居跡

- 直径5.6m、地床炉、埋甕
- 炉の周辺から土偶と浅鉢などが出土

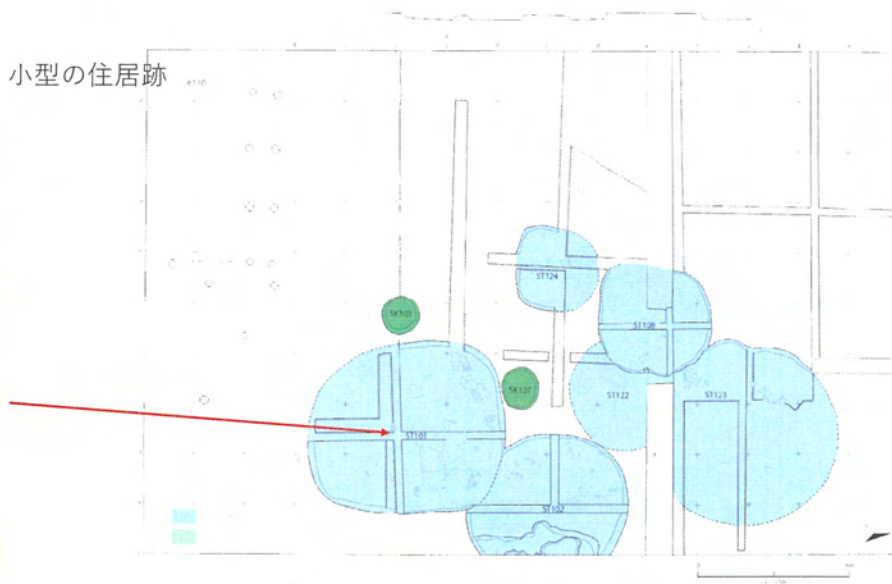
ST17竪穴住居跡



5

水木田遺跡 東区の竪穴住居跡群

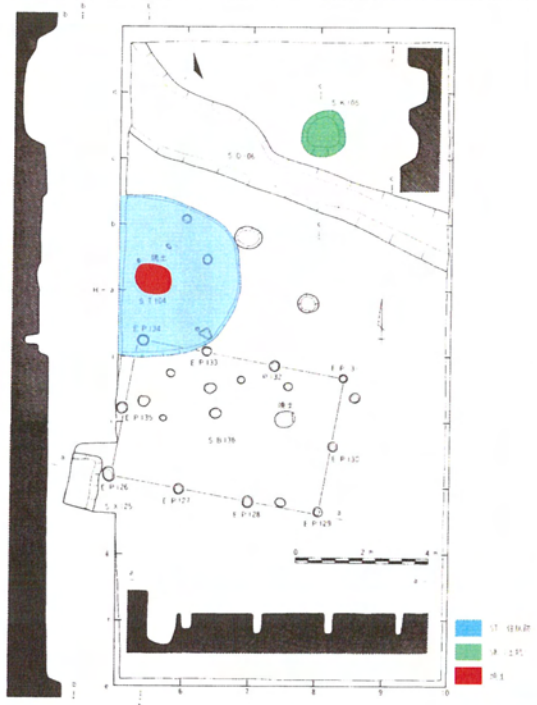
- 大木8a式期
- 直径3.3~7.8m、中型・小型の住居跡



6

水木田遺跡 東区 竪穴住居跡群

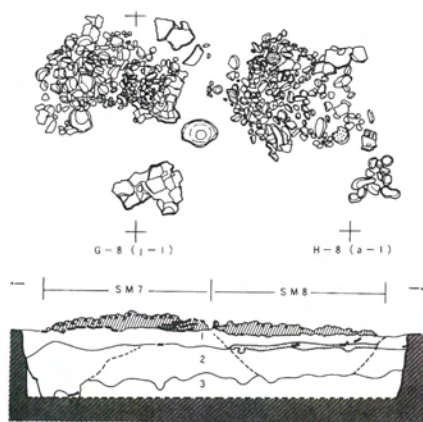
- ST104 大木8a式期
直径5.9×4.9m 地床炉



7

水木田遺跡 西区・集石SM7・8

- 土器廃棄集中地点で検出される
- 広がりは、直径60~70cmの円形や楕円形状



SM7

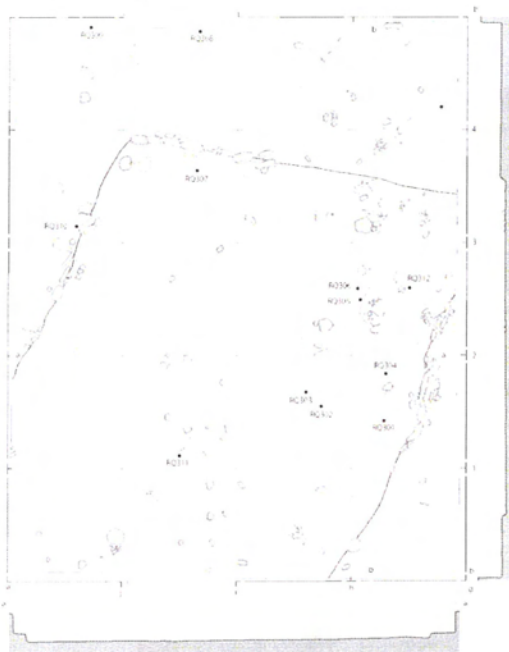


SM7土層断面

8

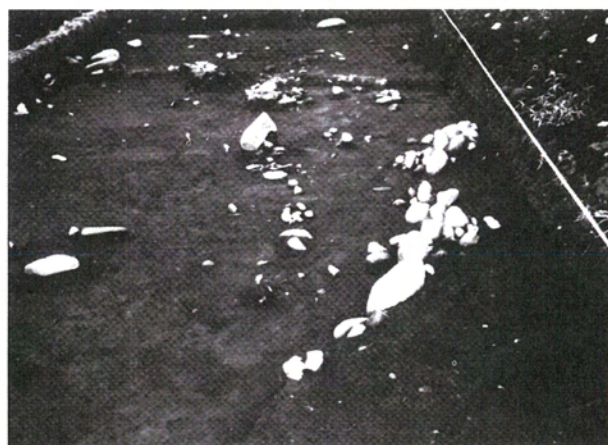
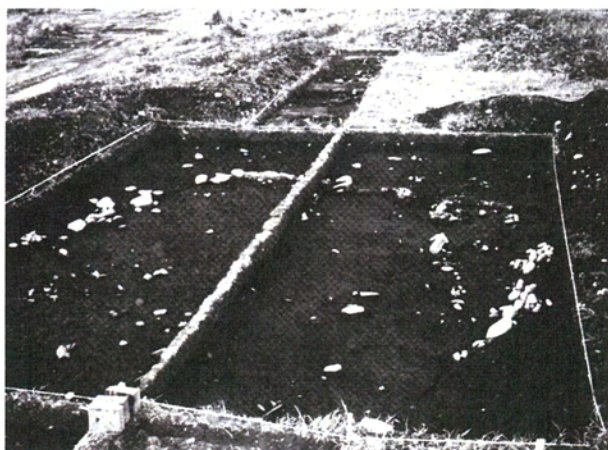
水木田遺跡 中央区・配石遺構SM201

- 規模—最大径は約8 m、方形の浅い掘り込み内に、細長い礫を配する。
- 出土遺物 石器・土器、石棒、土偶



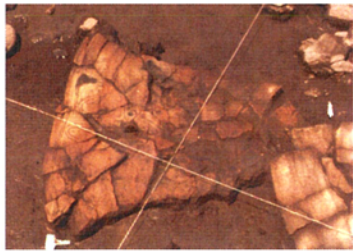
9

水木田遺跡 配石遺構SM201

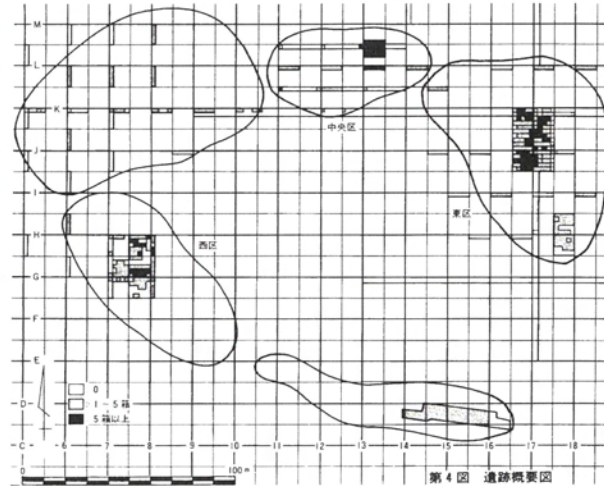


10

水木田遺跡 捨て場



・ RP24-2



11

水木田遺跡の縄文土器

大木7a式土器 深鉢

- ・ 波状口縁が特徴的
- ・ 波頂部にあわせて縦の隆帯貼り付け、押圧や刺突文
- ・ 体部は無文が多い



12

水木田遺跡の大木7a式土器

関東地方の五領ヶ台式の影響を受けていると思われる土器

・ 体部上が大きく内湾して膨らみ、口縁部が短く開く器形

・ 三角形状の刺突、刻み目、交互刺突文、波状文

深鉢



浅鉢

8



深鉢

5

13

水木田遺跡の大木7b式土器 深鉢

・ 長胴形で四単位の大波状口縁、頂上部に装飾

・ 弧状文、体部にY字状の懸垂文

・ 縦方向の縄文、綾絡文

・ 交互刺突文



14

水木田遺跡の大木7b式土器

- ・ 縄文を押しつける文様が多样される
- ・ 浅鉢も波状口縁が多い



15

水木田遺跡の大木7b式土器 深鉢

五領ヶ台式の影響を受けた土器

- ・ 交互刺突文を多用、楕円文
- ・ 口縁部が屈曲する器形



16

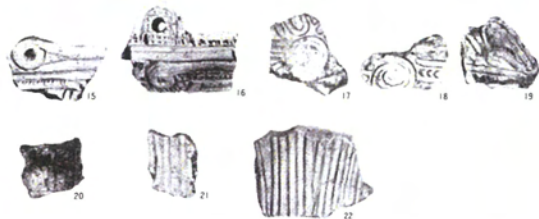
円筒上層式土器・新崎式土器

・北東北を中心に分布する円筒上層b式土器。
大木7b式土器と同じ時期と考えられる。

・円筒形の器形、縄を押しつける連続した弧
状の文様。日本海側に多い。

・新崎式土器は、北陸方面に由来する、**円筒上層式土器**
中期前葉の土器。日本海側に多い。

新崎式土器



深鉢

17

水木田遺跡の大木8a式土器

・長胴の大型深鉢、高
さ89cm

・口縁部を一周する透
かし状の突起

・クランク状や波状の
隆帯貼り付け文

・同様の文様構成の深鉢は、
村山市落合遺跡などにも認
められる。



18

水木田遺跡の土偶

- 大木7b式期を中心とする土偶
立像、大型化、有節沈線文による弧状や渦巻状の文様



百々山遺跡（山形市）



中ノ内A遺跡
（宮城県川崎町）

山形盆地や、宮城県でも類似する土偶
が出土。

19

水木田遺跡の土偶

- 西ノ前タイプの土偶が中心、他の系統の土偶もあり
- 顔の表現があるもの、ないもの



20

水木田遺跡の土製品

- ・ 耳飾（耳栓）－ 5 点出土
- ・ 円盤状土製品・ 三脚土製品・
- ・ 土製円盤

三脚土製品は、最上地方では稀である。山形盆地南東部や上山盆地に多い。 牧野遺跡（上山市）



耳飾



三脚土製品



土製円盤



21

水木田遺跡の石製品

- ・ 石棒、石冠、線刻石
- 石冠は、無文と有文のものあり
- 石棒は無頭のもの、破損品

石棒-直径10cm以上
長さ40cm以上

線刻礫

石冠



158



159



160



161



162



157

22

最上町かっぱ遺跡

- ・向町盆地に位置する。小国川の支流、鳥出川右岸の山裾から河岸段丘に立地。4.8km西に水木田遺跡。
- ・山形県埋蔵文化財センターにより、平成12年に6,000㎡が調査された。

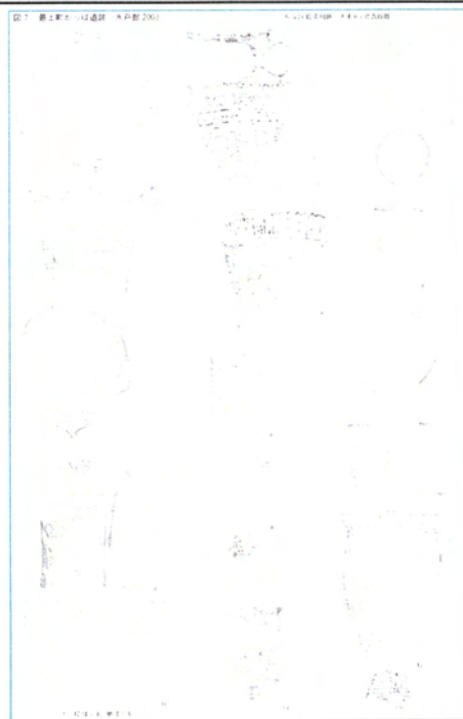


かっぱ遺跡の調査区

23

かっぱ遺跡の中期縄文土器

- ・旧河跡SG21より大木8a式古段階の資料が出土。
- ・口縁部にS字状突起・橋状把手、縦方向の連続する押圧縄文列、刻み目
- ・体部に曲折文、波状文、懸垂文
- ・外反口縁の深鉢、キャリパー形の深鉢がある。口縁部に文様を展開させ、体部が縄文のみのものがある。



24



かっぱ遺跡
大木8a式古段階の土器

25

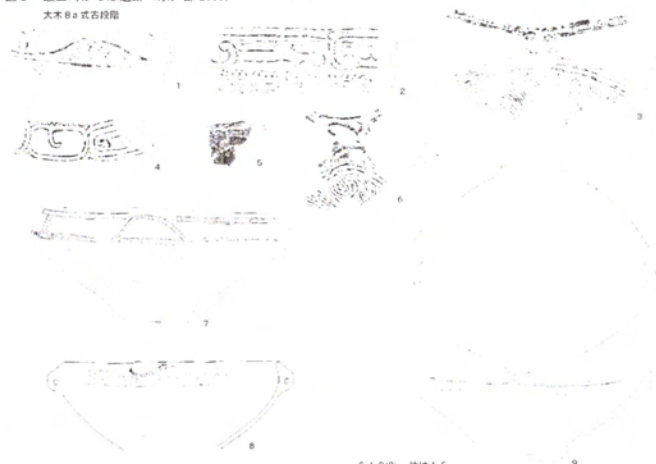


かっぱ遺跡 深鉢

・浅鉢類

平面形が楕円形状になるものもある。
半截竹管による文様が施された浅鉢→北陸系か

図8 最上町かっぱ遺跡（水戸部 2003） S G21 田川川跡
大木8a式古段階



浅鉢

S-1 818、地味1 G

26

西ノ前遺跡について

- 県北の舟形町に位置。小国川の河岸段丘上に立地する。
- 平成4年に県教育委員会により発掘調査が実施（尾花沢新庄道路建設事業）。遺跡の西半分が調査。
- 縄文時代中期前半（5,500～5,000年前）のこの地域の中心となる集落
- 出土した土偶48点は国宝に指定された。



西ノ前遺跡位置図

27

西ノ前遺跡

- 竪穴住居跡 9棟が確認→2棟は10m以上の規模
- 半環状に住居が並ぶムラの構成
- 捨て場に大量の縄文土器や石器などが廃棄（約900箱）

西ノ前遺跡
発掘調査区

西ノ前遺跡
現在の様子



28

西ノ前遺跡 縄文中期集落跡の構成



29

大型住居跡群

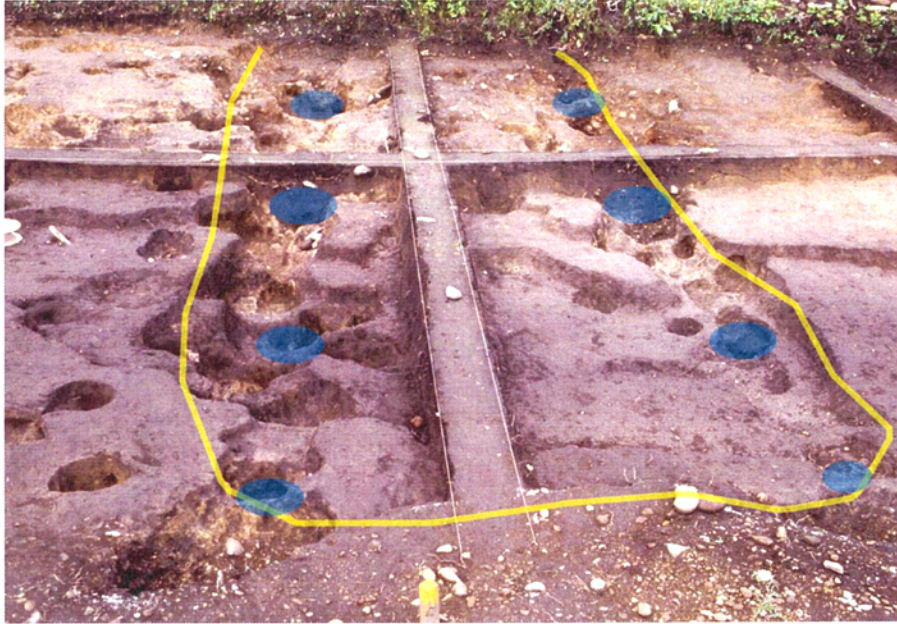
- ・ 調査区西側の段丘縁辺にST9住居群4棟が並ぶ。
- ・ 時期は大木8a式期。同時期に建っていた可能性。
- ・ どの住居跡も建て替えが行われている。



30

大型住居跡 ST9 d

長さ9 m以上、幅4.2m前後、大木8a式期



3回以上
建て替え

1間×3間
以上

梁間2.7~2.8m

桁柱間
2.4~2.8m

31

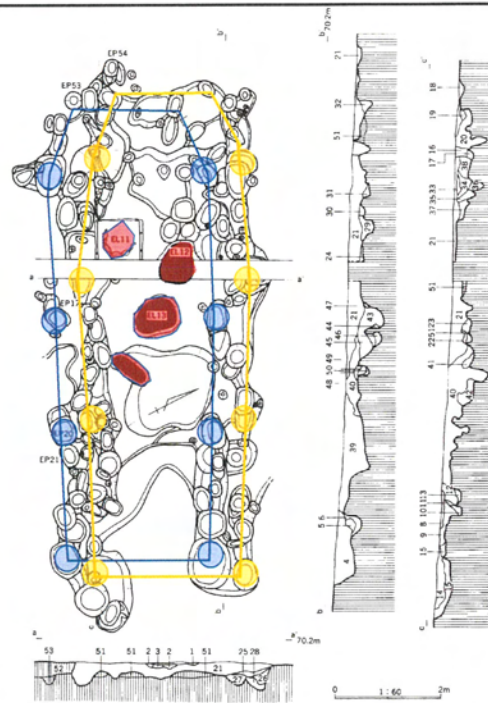
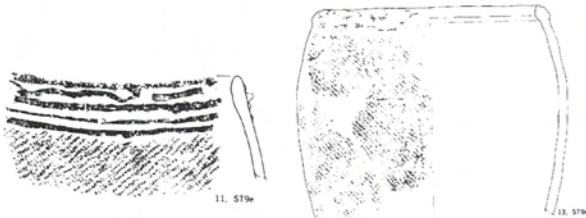
ST 9 e住居跡 (大木8a式期)

- ・長軸11m、短軸4.5m
- ・地床炉 3基、石囲炉 1基

1 × 3 間、梁間は約 3 m、桁の柱間は
2,2~2,7m ?

4 回以上の建て替え ?

炉跡は少なくとも 2 時期。左側が新しい炉 ? (石囲炉)



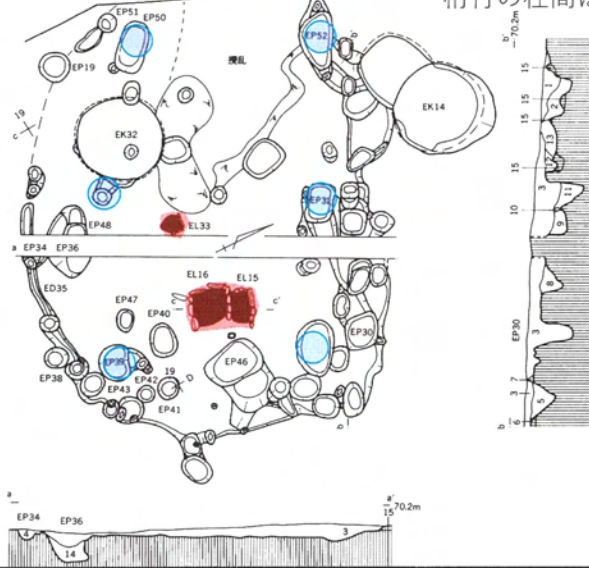
32

竪穴住居跡

ST9g竪穴住居跡（大木8a式期）

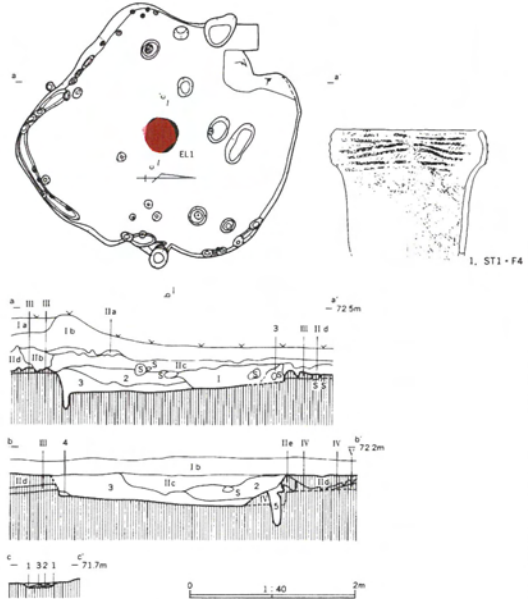
- 長軸7.5m、短軸6.2m

梁間3.3~3.6m、
桁の柱間は2.7m



ST1竪穴住居跡（大木8a式期）

- 一辺3m

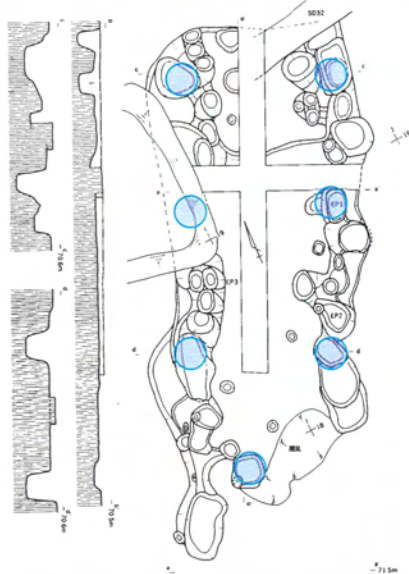


33

竪穴住居跡

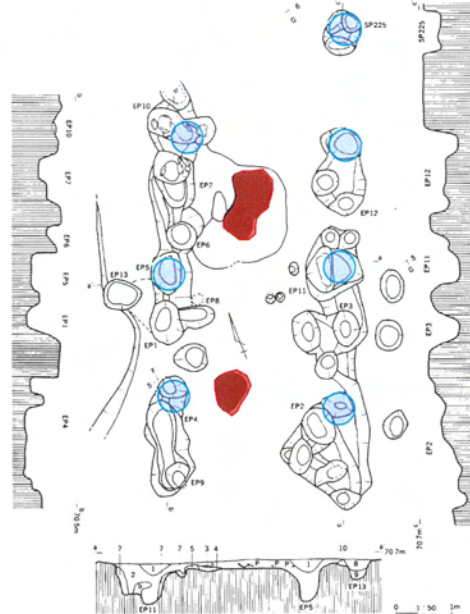
ST34竪穴住居跡（大木8b式期）

- 長軸11m、短軸4.8m、梁間は3.3m



ST96竪穴住居跡（大木8a式期）

- 長軸7.6m、短軸4.8m、2回以上~4回?の建て替え



34

大量の食糧を蓄えた貯蔵穴

- 貯蔵施設
フラスコ状土坑が60基以上確認された。
- 当時の人々の主要な食糧（クリ・クルミなどの木の実類）
- 秋季に大量に貯蔵→冬期間の食糧
- 標準的なサイズ
口径：1～1.5m
底直：1.4～1.6m
深さ1.5～1.8m



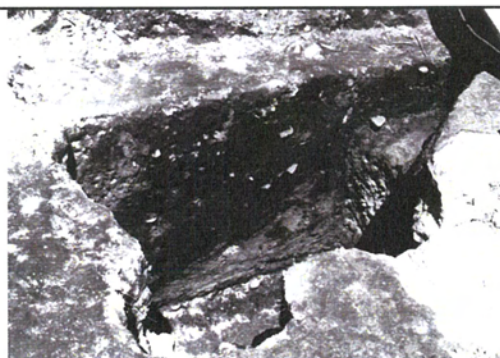
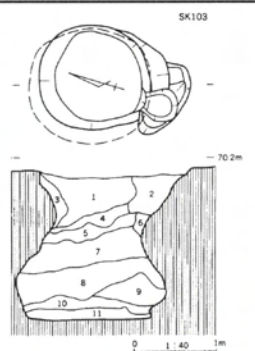
木の実類加工の石器

石皿

凹石

35

西ノ前遺跡の フラスコ状土坑



SK8

SK116



SK107
(石組あり)

36

遺物包含層（捨て場） SX261（西から）



縄文の女神の出土地点

幅7.5~14m
深さ2m

37

遺物包含層 縄文土器の出土状況



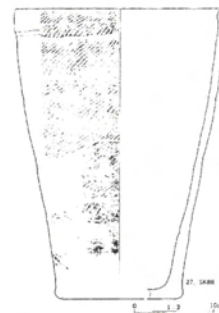
約750箱の土器・石器が出土
大木7a~8a式

38

出土した縄文土器

大木7a式土器 中期の初め、西ノ前遺跡の集落が始まった時期

・竹管などによる沈線文、交互刺突文、体部は縄文や無文、装飾に乏しい。



深鉢



169



149



39

出土した縄文土器

大木7b式土器 深鉢



151



152

新崎式土器（北陸）



153

40

大木7b式土器

浅鉢

深鉢



41

出土した縄文土器

大木8a式土器 深鉢



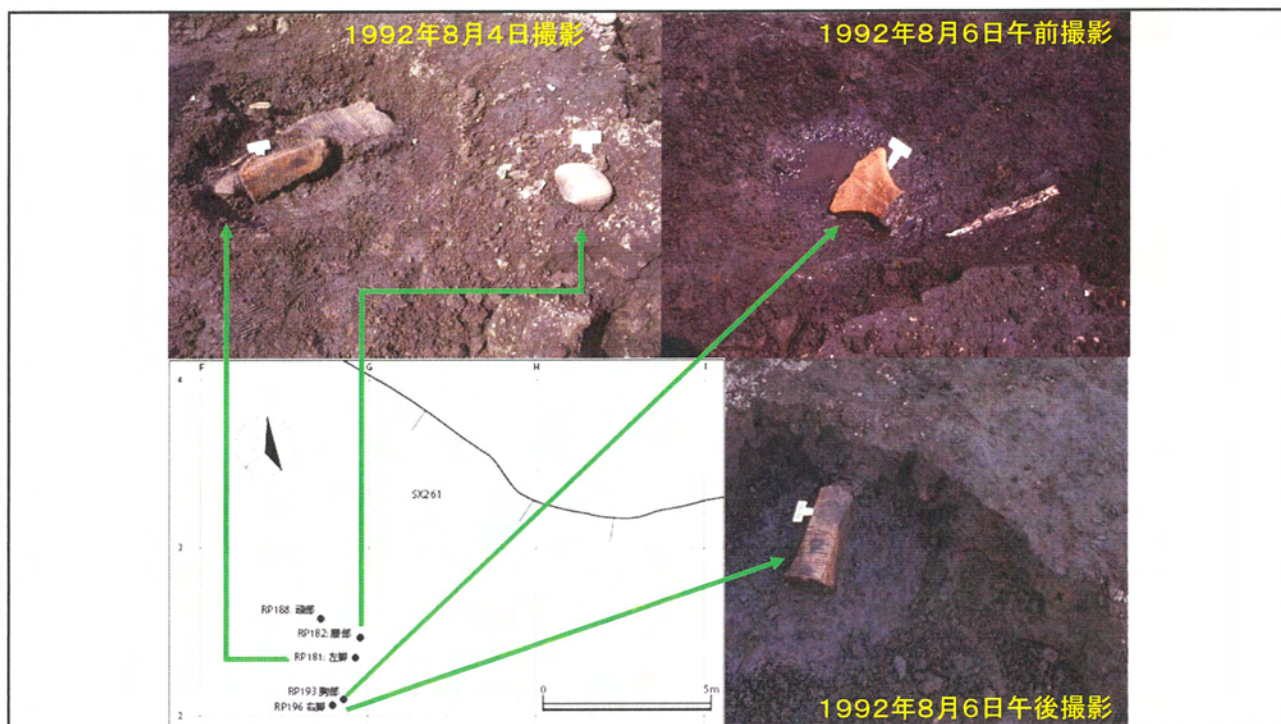
42



43



44



45

西ノ前遺跡の縄文の女神 (大型土偶)

- 高さ45cmと全国で最大
- 頭部と肩の部分に穿孔
→飾りなどがあった可能性
- 完全な形に復元できたのはこの個体のみ
- 「出尻形土偶」
「西ノ前タイプ」
- 板状の上半身、W字状胸の表現、張り出したお尻、長脚で自立する。



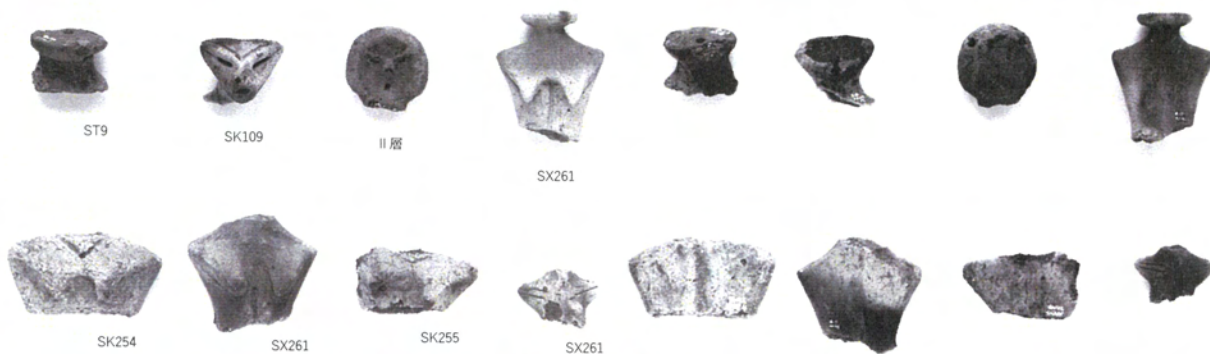
46

西ノ前遺跡の土偶

土偶は48点出土

表側

裏側



河童形土偶(頭の上が平ら)古いタイプ
顔の表現は新しい要素

西ノ前遺跡で
一番小さな土偶

47

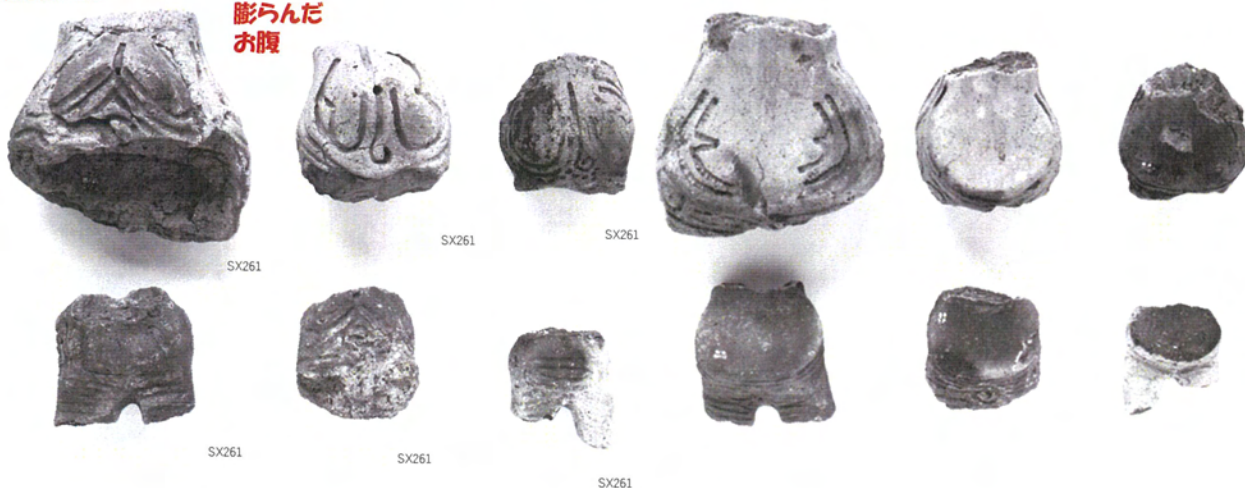
西ノ前遺跡の土偶

表側

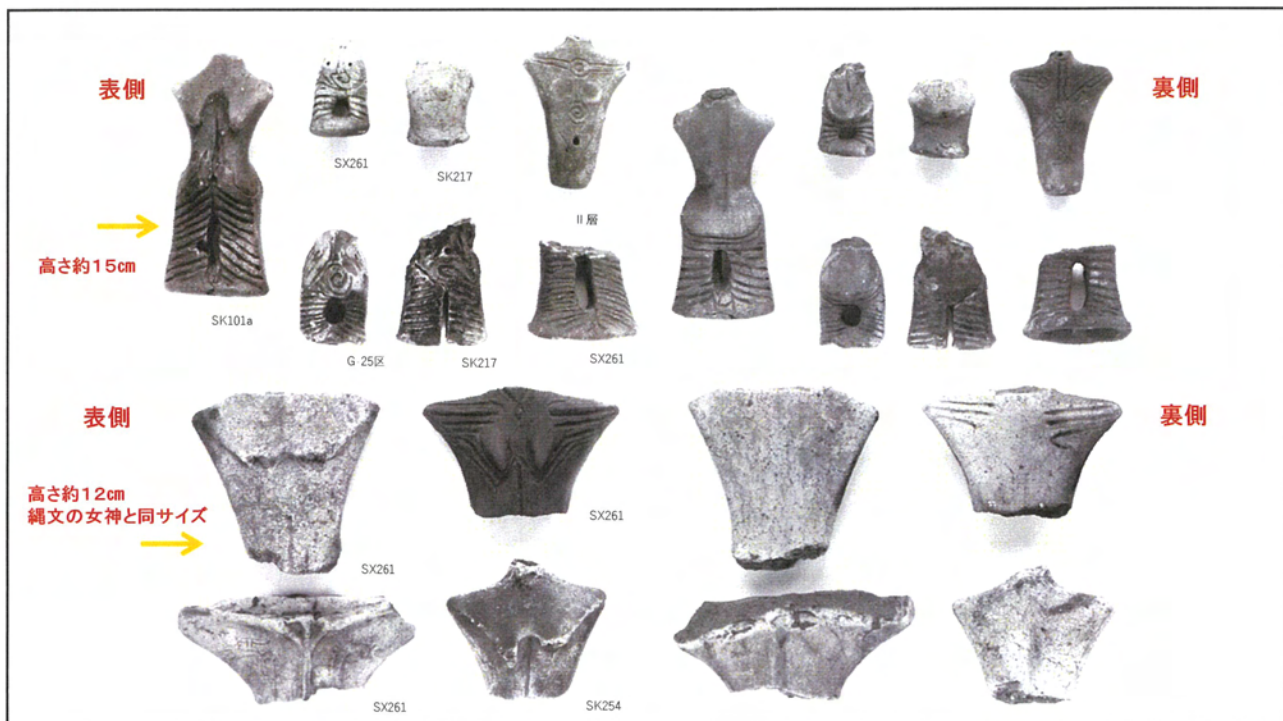
裏側

高さ約11cm

膨らんだ
お腹



48



49



50



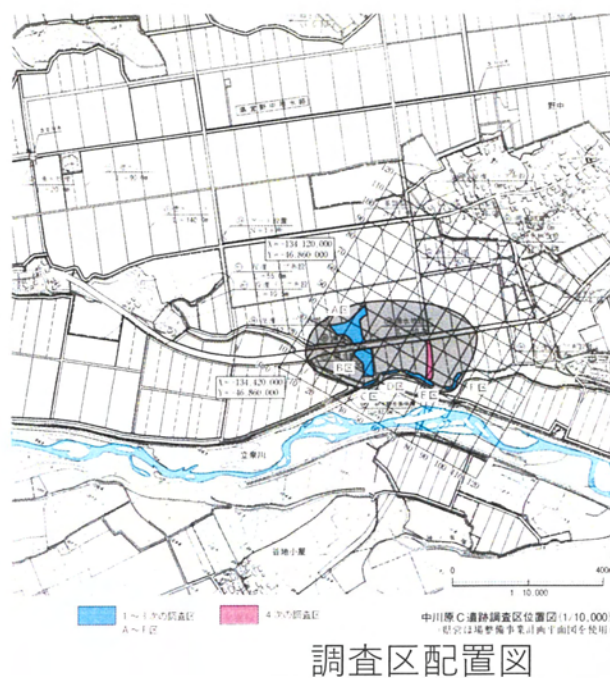
51



52

中川原C遺跡（新庄市）

- 県北の新庄盆地、泉田川の河岸段丘上に立地、地域の中心的なムラ



53

中川原C遺跡（新庄市）

発掘調査区

- 県埋蔵文化財センターにより、平成11・12年に8400㎡が調査（第1～3次調査）
- 中期前半の集落跡（約5,500～5,000年前）→
- 大木7b～8a式期が中心
西ノ前遺跡と同時期
- 1000箱を超える出土遺物
多数の土偶も出土



54

中川原C遺跡の遺構

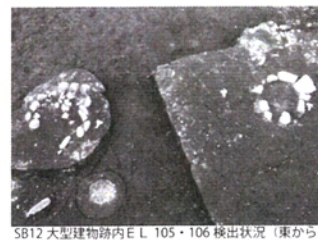
- 長方形の大型の建物跡が4棟、
方形の建物跡が4棟
- SB12住居跡は長さ15m
の大型住居跡
- 円形の建物跡が19棟以上
(ピット群、緑の円の部分)
- 土坑 廃棄土坑 5基
小型で袋状の土坑
- 埋設土器 35基 (赤い点)



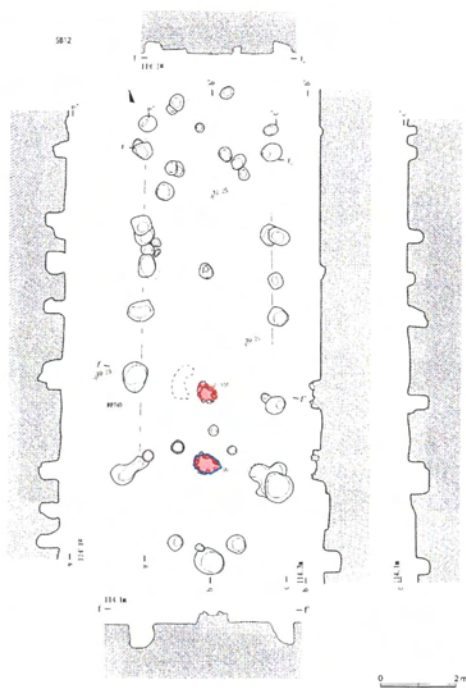
55

SB12建物跡

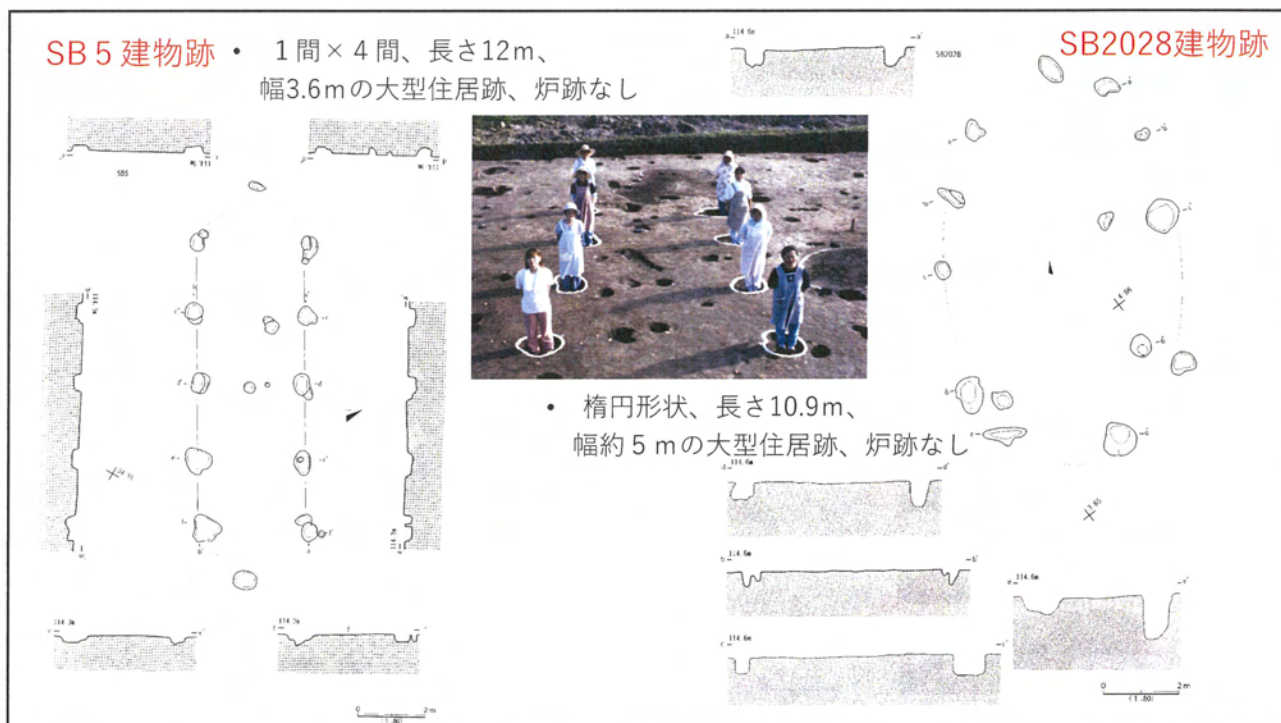
- 長さ15m、
幅3mの大型住居跡
- 建物内に2基の石囲炉



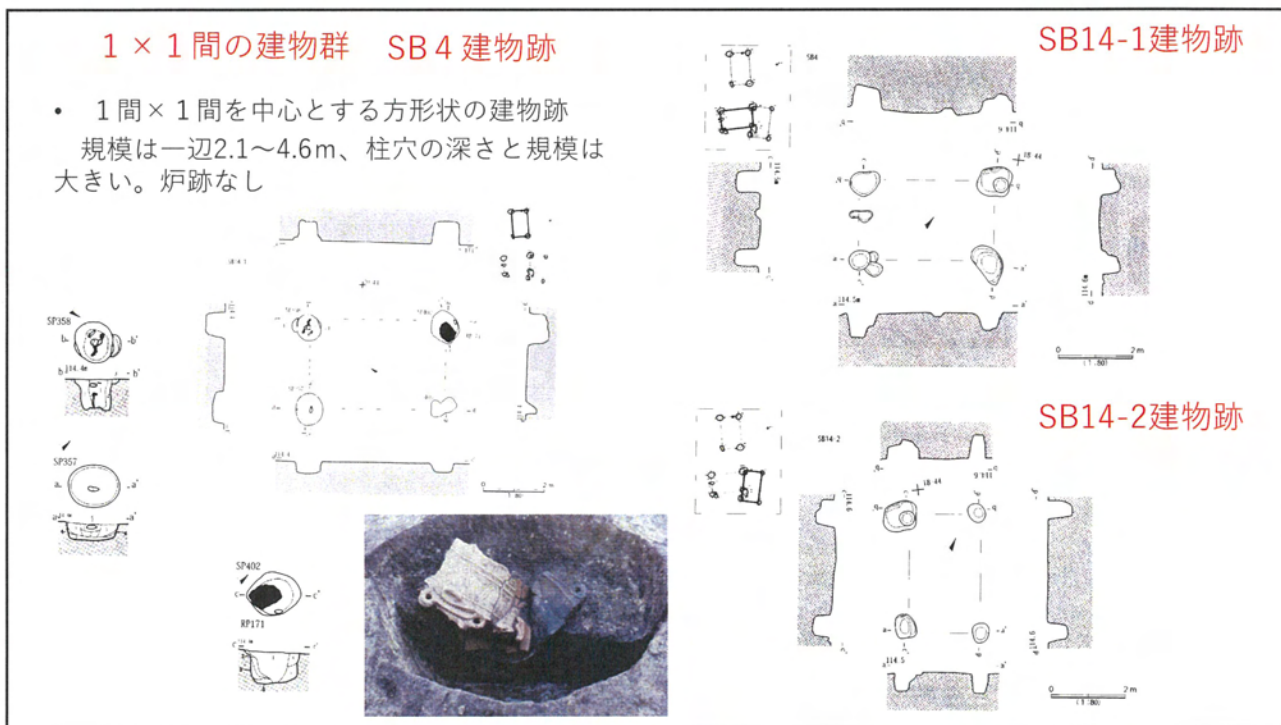
SB12 大型建物跡内 E.L. 105・106 検出状況 (東から)



56



57

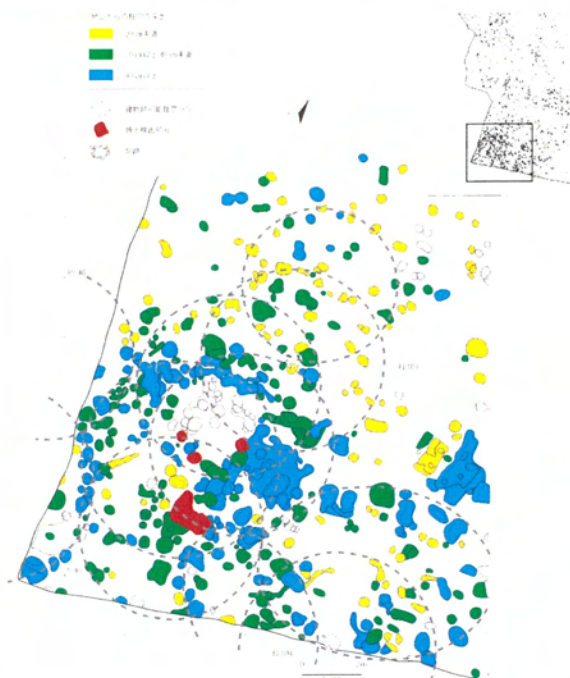


58

円形を中心とする住居群

B区南西部柱穴群

- 11棟以上の円形・楕円形の建物群が重複
直径は、約5～7m。
- 石囲炉2基、焼土

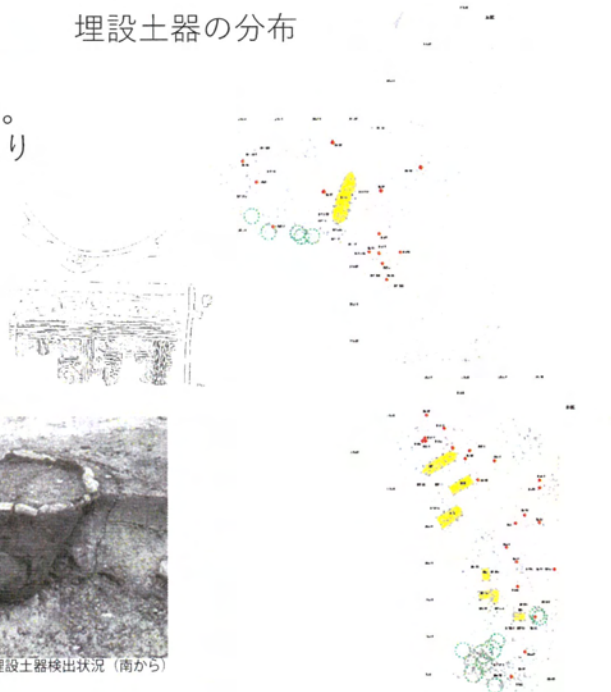


59

中川原C遺跡の土器埋設遺構

埋設土器の分布

- 土器棺の可能性。小児の埋葬などか。
リン・カルシウム分析（周囲の土壌より
濃度高い）
- 分布—北側のA区住居跡周囲に分布
南側のB区は、建物跡分布より北側
に分布
- 時期は大木7b~8a式



EU52 埋設土器検出状況（北から）



EU70内 RP1114 埋設土器検出状況（南から）

60

土坑 ・土器等が廃棄される。

SK117
土坑

SK119
土坑

SK117出土土器

SK119出土土器・RP743

61

捨て場 B区捨て場状況

小型住居群とその外側に形成される

B区中央遺物集中域

RP141

62

出土した中期前半の土器

大木7b・8a式土器を古・新の2段階に細分
(佐竹2002)

大木7b式古段階

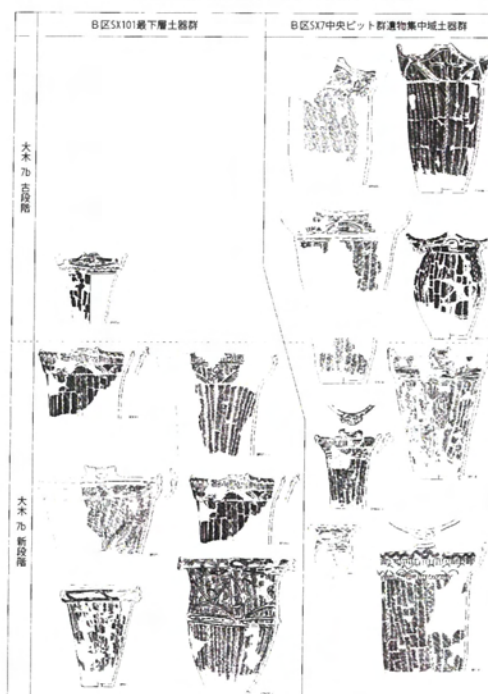
B区SX7中央ピット群遺物集中域。

4単位大波状口縁、波頂部は花卉状に装飾

大木7b式新段階

B区SX101最下層、SX7中央ピット群遺物集中域より出土。

押圧縄文による文様、波状の隆帯、隆帯上に連続して縦に押圧縄文



63

中川原C遺跡

大木7b式古段階 深鉢



RP0266



RP0188

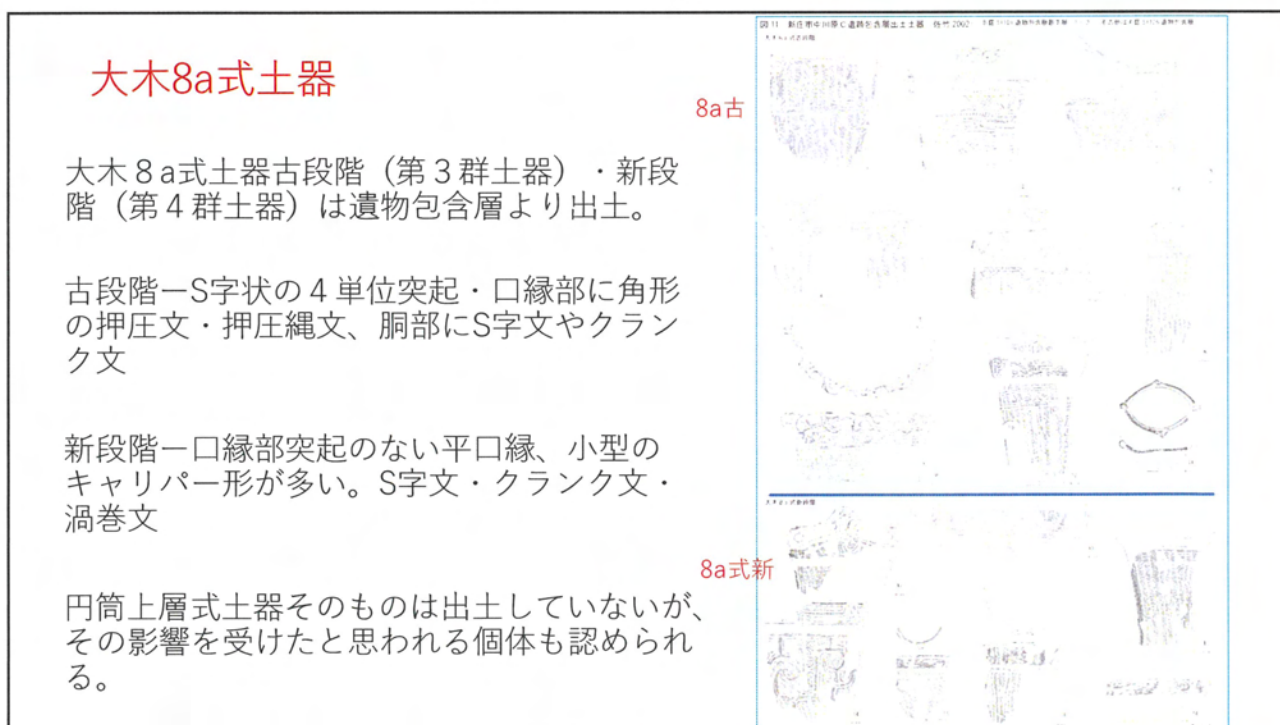


RP0091

64



65



66

中川原C遺跡 大木8a式古段階
深鉢



67

中川原C遺跡 大木8a式古段階



RP0592



RP0260



RP1125



RP0622

68

中川原C遺跡 大木8a式新段階



69

中川原C遺跡

円筒上層式土器の影響？が見られる土器



70

中川原C遺跡の土偶

- ・土偶41点が出土、大部分が西ノ前タイプ
- ・カップ形土偶も確認される。(古いタイプ)
- ・面相が表現される。(新しいタイプ) 頭部に複数の孔をもつ



71

中川原C遺跡の土偶

胸部



胸部・
胸部
下半



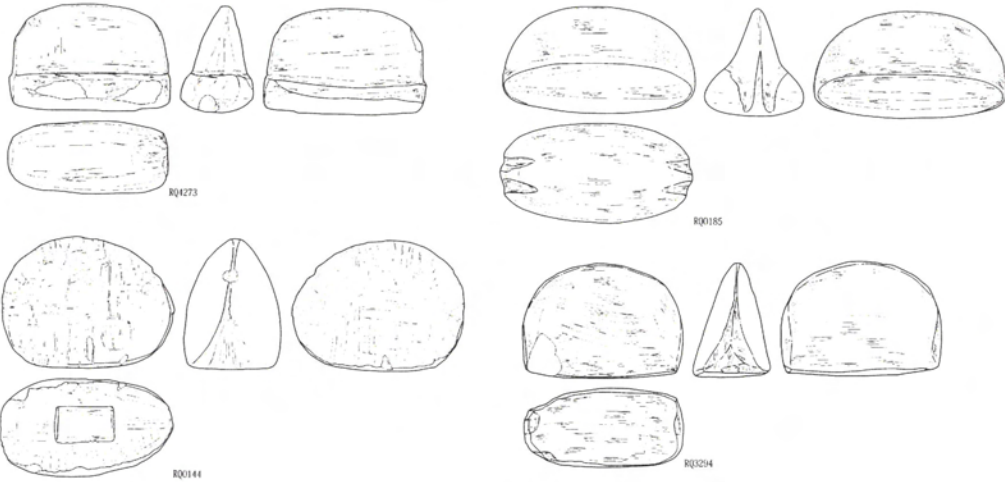
脚部



72

中川原C遺跡の石製品

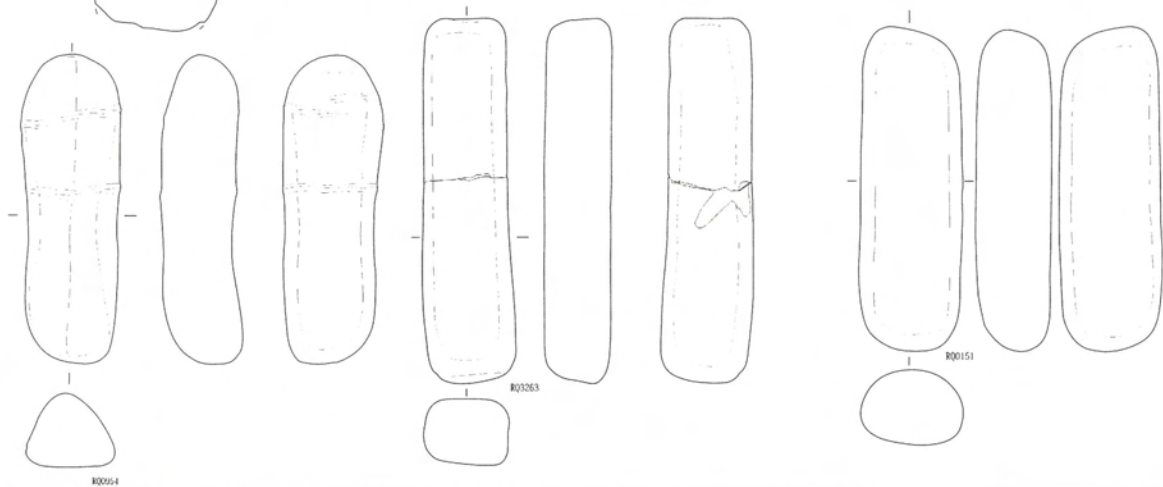
石冠 軟質な石を用いて整形。



73

中川原C遺跡の石棒

棒状の自然礫を用いているものが多い。大型石棒と考えられるものもある。無頭。



74

大蔵村銅山川流域の遺跡

・大蔵村清水の白須賀遺跡 上竹野遺跡の北東約750mへ位置する。

昭和29年、山形大学や致道博物館により調査が行われた。
縄文時代中期中頃から後期初めにかけての時期。
昭和32年、中期後葉の住居跡と思われる遺構が調査された。
地元の方が、大型の土偶や足形付土製品を採集。



・注口土器（県指定文化財）
（大木8b式）



・土偶（中期）
高さ19.1cm



舟形町西ノ前遺跡
国宝土偶

75

遺跡の変遷（推定）

約12万年前	縄文時代	草創期	上竹野 白須賀
約8000年前		早期	
約6000年前	前期	↓ 集落	
約5000年前	中期	↓ 集落	
約4000年前	後期	↓ 集落	
約3000年前	晩期	↓ 集落	
約2300年前	弥生時代		↓ 集落
約1700年前			



76

白須賀遺跡出土品（大蔵村教委委員会）

- ・足形付土製品

子供と思われる足形が残る

足形が残る土製品は県内で当遺跡のみ。

- ・村山市西海淵遺跡で、手形付土製品が出土している。

- ・東北地方北部に類例が多い。出土事例は限られている。



白須賀遺跡
足形付土製品 12×11cm

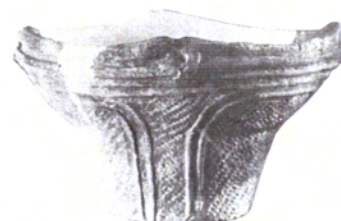


村山市西海淵遺跡
手形付土製品

77

白須賀遺跡の縄文中期の土器

大木8a式土器 ・粘土紐を貼り付けてS字状やクランク状の文様を施す。立体的な把手を付ける。



78

白須賀遺跡の大木8b式土器

(山形大学の調査資料)

浅鉢



深鉢



79

白須賀遺跡の大木8b式土器

大蔵村の所蔵資料

・粘土紐貼り付けにより渦巻文を中心とした文様が施される。

・人面状のモチーフ

深鉢突起



深鉢

80

大蔵村上竹野遺跡

・平成27・28年に、山形県埋蔵文化財センターにより約5,100㎡が調査された。一般国道458号改築事業。

・縄文後期後葉、晩期末葉から弥生にかけての時期に集落として利用されていたが、中期前葉の遺構や、中葉の遺物なども出土している。

・中期中葉の大木8a、8b式期は、白須賀遺跡が主な集落跡。

遺跡の全景



81

上竹野遺跡の中期の遺物

・SX195性格不明遺構（竪穴状、4.5×2.6 m）から、遺物が出土

・大木7b式土器に新崎式土器（北陸系）が共伴して出土した。耳飾も出土



SX195

中期の土器



耳飾



82




83



84

最上地域の縄文時代中期前葉から中葉の 遺構と遺物ー遺構のまとめー

- ・ 長方形大型住居跡を中心として構成される大規模集落跡、円形の小・中型住居跡も伴う
- ・ 大型のフラスコ状土坑（貯蔵施設）、廃棄用の土坑
- ・ 埋設土器（土器棺墓）  土坑墓も存在する可能性
- ・ 捨て場 大量の遺物が出土する。継続的に廃棄されている
(県内の他地域の同時期の集落も同じような在り方)

85

遺物のまとめ

・ 縄文土器

大木7b・8a式土器を中心に、まとまった資料が出土。県北の大木式土器の特徴。

五領ヶ台系の土器、少量の北陸系土器と円筒上層式土器が伴う。円筒土器を部分的に模した土器、北陸系土器との折衷的？な土器もあり。

・ 土偶と土製品

西ノ前型式を中心とする土偶が多数出土。他の祭祀的な遺物は少ない。

・ 石製品

大型石棒が出土。無頭のものが中心。わずかに北陸系？の石棒も認められる。

大集落からは石冠が出土。有文のタイプが主。

86

引用・参考文献（パワーポイント配布資料補足）

- 大友義助 1999 『大蔵村史 通史編』 大蔵村
 押切智紀 2012 『平成 24 年山形県立博物館企画展 豊穡と祈り—縄文女神たちの宴と古墳時代人の思い—』 山形県立博物館
 柏倉亮吉ほか 1969 『山形県史 資料Ⅱ編 考古資料』 山形県
 菅原哲文・長澤友明・三浦一樹 2019 『上竹野遺跡第 1・2 次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 234 集
 菅原哲文 2019 「第二節 縄文時代中期の長井」『長井市史 通史編第一巻 原始・古代、中世』長井市 pp.105-148
 菅原哲文 2020 「山形県大蔵村上竹野 2 遺跡出土の縄文時代遺物」『山形考古』50 号 pp.25-38
 水戸部秀樹 2014 『かっぱ遺跡調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 114 集
 三宅徹也 「円筒土器上層様式」『縄文土器大観 1 草創期・早期・前期』小学館 pp.343-345

年代	時代	土器型式
約5,500年前	中期	大木7a
		大木7b
		大木8a
		大木8b
		大木9
		大木10
約4,500年前	後期	宮戸 I b・袖窪
		南境 1（堀之内 1）
		南境 2（堀之内 2）
		宝ヶ峯 1（加曾利B1）
		宝ヶ峯 2（加曾利B2）
		宝ヶ峯 3（加曾利B2）
		新地 1 瘤付土器 I
		新地 2 瘤付土器 II
新地 3 瘤付土器 III		
新地 4 瘤付土器 IV		
約3,300年前	晩期	大洞B
		大洞BC
		大洞C1
		大洞C2
		大洞A
約2,400年前		大洞A

※年代は暦年較正年代による

山形の縄文時代中期以降の時代区分（長井市史第 1 巻より）

口縁などが認められる。

Ⅱ群土器（大木 7b 式土器）は、SX261 からまとまった数量が出土している。大型の長胴となる深鉢は、大波状口縁と平縁のものが認められ、口縁部の文様には押圧縄文や沈線による弧状を主とした文様が施される。浅鉢も種々のサイズがありバリエーションに富む。

Ⅳ群土器（大木 8a 式土器）は、SX261 内と集落域から大量に出土している。S 字状の突起やキャリパー形の器形が多い。古い段階から新しい段階まで認められる。

Ⅴ群土器（大木 8b 式土器）は、集落域を主として出土している。図示資料は少ない。古・中段階のものであり、新しい時期のものは報告されていない。

その他、Ⅲ群土器として、北陸の新崎式土器の出土が報告されている。円筒上層式土器は報告されていない。

土偶・土製品

土偶は 46 点出土しており、国宝に指定されている。大木 7a～8b 式期に伴うものと考えられる。特筆されるのは、接合し完全な形となった高さ 45cm の大型土偶である。自立し、板状の胴体と後ろに張り出しだ臀部、W 字状に胸が表現され、髪形の表現はあるが顔は表現されない。頭部に 8 箇所、両腕に 1 カ所ずつ、合計 10 箇所の穿孔がある。この形態の土偶は「西ノ前型式」と呼ばれている（阿部 1996）。

その他の土製品として、耳栓 10 点、管状土製品が 7 点以上、スプーン状土製品、スタンプ状土製品なども出土している。

石製品

石棒が 6 点報告されている。大型石棒の類が多い。無頭である。その他、無文の石冠、環状の石製品などが出土している。

(2) 中川原 C 遺跡

新庄市大字十日町字中川原に位置する。泉田川の河岸段丘上に立地し、遺跡範囲は東西 500m、南北 200 m に及ぶ。平成 11・12 年に山形県埋蔵文化財センターにより第 1～3 次調査が行われ、8,400 m²が調査された（佐竹 2002）。中期前半の遺構は A、B 区を中心に検出され（第 3 図）、約 1060 箱の遺物が出土している。また、平成 18 年に第 4 次調査が行われたが、この調査区は縄文後期の遺構分布が確認された（石井 2007）。

建物跡

建物跡と考えられる遺構が 22 棟確認された。報告書では、A～C 類に分類されている。A 類：1 間×数間の柱穴配置で縦長のプランとなるもの、B 類：4 本柱を一単位として有するもの、C 類：柱穴が円形・楕円形の配列を成すもの、となる。

A 類の SB12 は、長軸約 15 m、短軸約 3 m で 1×4 間の間取りをもつ。建物内の南側に寄った位置に、2 基の石囲炉が検出されている。遺構検出面は当時の生活面より大分下がった位置であるため、掘り込みをもつ竪穴式であった可能性も考えられる。炉の存在より住居跡と推測される。同様な建物 SB 5、6 は調査時に炉跡は検出されていないが、同じであろう。

B 類は、一辺が 2～4.6m の建物跡であるが、規模から考えて居住施設にはならず、倉庫的な役割もしくは別の用途も想定される。柱穴の規模や深さは大きく深い。A 群とは分布場所を異にしている。SB 4 の柱穴に、大木 7b 式新段階と思われる土器が廃棄されていた。

C 類は、19 棟以上が存在した可能性がある。B 区南西部ピット群、B 区中央部ピット群、A 区西側ピット群、A 区西側ピット群は、柱穴が密集して検出された地点であり、円形プランの直径 5～6 m ほどの建物跡が複数切りあって検出された。建物跡の掘り込みは確認されないが、地床炉や石囲炉が認められる。またこのエリアからは比較的多くの土器が出土する。

埋設土器

35 基が検出された。A 区西半から B 区北半にかけて分布の集中が認められる。本来の埋設遺構の掘り込み面から 30～50cm 削平されており、土器は体部下半から底部近くの部位しか残存していない。リン・カルシウム分析により、周囲の土壌より土器内部の土壌の方がリン・カルシウムの濃度が高い事が報告されており、墓としての機能が推測されると報告されている。文様で型式が判別できるものは大木 8a 式が多い。

土坑

浅い掘り込みをもつ 1 類、小型で袋状を成すⅡ類が中期の集落に伴うものである。Ⅰ類は、廃棄土坑と考えられ、大木 8a 式土器が出土している。Ⅱ類は規模からすると貯蔵穴にはならないものと思われる。

捨て場

A区SX126遺物集中域、B区SX101が確認された。SX126は大木8a式期で、8a式期の新しい時期のものも認められる。SX101は大木7b～8a式期である。最下層では、大木7b式期の新しい時期の一括資料が出土した。

縄文土器

(a) 大木7b式土器

第1群土器(大木7b式古段階)は、SX7B区中央ピット群遺物集中域から比較的まとまって出土した。深鉢は4単位の大波状口縁で、波頂部は花卉状に装飾される。口縁部は沈線による区画文が主で、体部は縄文のみ、縦方向の結節回転文が認められる。長胴となる。第2群土器(大木7b式新段階)は、B区SX101最下層、B区中央ピット群遺物集中域SX7からもまとまって出土している。外反する口縁部になるものと内湾するキャリパー状になる口縁のものがあり、押圧縄文による文様や、波状の隆帯を貼り付け、隆帯上に連続して縦に縄文を押圧するものが多い。

(b) 大木8a式土器

第3群土器(大木8a式土器古段階)は、SX126A区中央捨て場、大型建物跡周辺、B区4本柱建物跡柱穴中より出土した。キャリパー形の器形と外反する器形が見られ、口縁部にはS字状の突起が付される。縦方向の連続した押圧縄文も認められる。第4群土器(大木8a式新段階)はSX126A区中央捨て場で出土する。出土量は前段階よりかなり少ない。口縁部突起がない平縁のものも多く、小型のキャリパー形土器の頻度が多い。

県南部の土器と比較して長胴形の器形が多く、装飾がそれほど煩雑でないものが多い。

土偶と土製品

土偶は41点出土した。大木7b～8a式期の時期とみなされる。西ノ前型式になるものである。面相が表現されないタイプと表現されるタイプがある。頭頂部が小型の円盤状で平坦となる土偶は7b式期に伴うと考えられる。面相が表現されるものは、頭部に複数の穿孔が見られ新しい様相を示すと思われる。大木8a期に伴うものであろう。その他、耳栓形の耳飾などが出土している。

石製品

石棒、石冠が出土している。石棒は5点出土しており、全体の形状がわかるものは、長さ30cm台の棒状の自

然礫を利用している。いずれも無頭の石棒になると考えられる。石冠は4点出土した。無文のものが3点、渦巻文などの文様が施されるものがある。

(3) 水木田遺跡

最上町大字月楯字水木田、字畑中、字清水下に所在する。向町盆地内にあり、小国川の河岸段丘上に立地する。東西350m、南北250mの広がりをもつ。標高は186～188m前後を測る。

昭和53年に県営圃場整備事業(最上町中部地区)により、山形県教育委員会が主体となり、最上町教育委員会の協力を得て調査が行われた。調査は、2×10m、4×800mのトレンチを遺跡内に入れ、遺物・遺構の集中地点はグリッドを拡張し調査が行われている(第4図)。確認された縄文時代中期の遺構は、竪穴住居跡8棟(ST17・ST101～124)、土坑、集石遺構(SM7・8)、配石遺構(SM201)、性格不明遺構(落ち込み)、その他平安時代の遺構も確認されている。約1000箱の遺物が出土している(阿部ほか1984)。

竪穴住居跡

西区で確認されたST17は直径5.6mの略円形の平面形で、地床炉を備える。炉の周囲から、大型土偶と土器が出土している。住居内からは埋甕と推定される土器が出土した。床面出土の土器や埋甕の土器より、大木7b式期の住居跡と考えられる。

東区では、7棟の竪穴住居跡が確認されている。時期が判明している住居については大木8a式期である。規模は、直径3.3～7.8mの小・中型の住居跡である。ST104は地床炉を備えている。ST101からは大木8a式の大型深鉢が出土している。

集石遺構・配石遺構

SM7・8集石遺構は、西区の土器廃棄群中に確認された。SM7は平面形は楕円形、74×53cmの広がりをもち、下には土坑の存在が予測される。SM8は63×60cmの広がりをもつ。集石下6×14cmの間に薄い焼土層があると報告される。どちらも大きさ20cm未満の円礫を用いていると思われる。

SM201配石遺構は、中央区で検出された。方形の浅い掘り込み内の壁面に沿って、細長い礫を中心に、全体として隅丸方形もしくは弧状の配置をとる。規模は、最

大径8m、最小径6.7mを測る。土器・石器、祭祀関係の遺物が出土している。配石近辺で出土した土器は、大木7b式土器と推測され、凹石、磨石、石斧などの石器類、土偶の破片2点、石棒1点が出土している。

捨て場

西区のH-7区を中心に、大木7b式期間を中心とする大量の土器が廃棄された捨て場が確認された。短期間に一括廃棄されたと考えられ、東西方向に幅4m、長さ約16mにわたって検出された。東区でもJ-16区で同様の土器群が検出されている。大木8a式期と推測される。

縄文土器

大木7a・7b・8a式土器が出土しているが、特に大木7b式土器は豊富な内容である。

(a) 大木7a式土器

出土量は多くない。4単位の大波状口縁をもつ長胴の個体が主で、体部は無文や綾絡文を伴う縄文だけが施文される。口縁部文様には、波頂部から垂下する隆帯が見られ、隆帯上は押圧や刻目などが施される。また、交互刺突文や三角形の印刻文を施す五領ヶ台系の土器が認められる。

(b) 大木7b式土器

大波状口縁の長胴形の深鉢が特徴的で、波頂部に種々の装飾が施される。口縁部は区画され内部には沈線や交互刺突文による文様が描かれる。体部は縄文で縦の綾絡文が多い。その他、体部が膨らみ口縁部が短く外反する深鉢、口縁部が内湾する器形の深鉢などがある。押圧縄文による弧状や渦巻状、直線状の文様、隆帯による弧状や懸垂状の文様、交互刺突文なども認められる。C字状の突起が口縁上に付される。五領ヶ台系の土器もこの時期に伴う。また、北東北の円筒上層b式土器や、北陸の新崎式土器も破片が出土している。

(c) 大木8a式土器

報告では、住居跡を中心に出土が報告されているが、図示されている資料は少ない。高さ89cmの大型深鉢である大木8a式土器が出土している。口縁部を一周する透かし状の突起、口縁部や多段構成になる体部文様にはクランク文や波状文が施される。

土偶・土製品

土偶は35点出土した。うち25点は「西ノ前型式」

の土偶である(渋谷・齋藤2015)。頭部を欠くが以下は完全な形で出土した大型の土偶は、大木7b式期の住居跡から出土した。有節沈線文による渦巻状や弧状の文様が施される。当遺跡でも、頭頂部が平らで顔面の表現が省略されたカップ形土偶が見られる。面相が表現されるのは、大木8a式以降になると思われる。また、西ノ前型式ではない別系統と考えられる土偶も確認される。

土製品は耳飾、異形土製品、土製円板などが出土している。耳飾は、いずれも耳栓状となる。土製品の中には三脚土製品が1点認められる。主に山形盆地南部で多く出土するものであり、県北では出土が稀である。円盤状土製品には、中央に円孔をもち、沈線で同心円状の文様を施すものがある。

石製品

石棒、石冠が出土している。石棒は4点出土している。大型のものは長さ40cm以上直径10cm以上となる。破損品が多いが、無頭の石棒になるものと思われる。石冠は3点出土している。無文のものが主であるが、文様が施されるものは渦巻文が認められる。

3 まとめ

調査が行われた最上地域の大型集落を中心に遺構と遺物の内容を述べてきた。以下に中期前半における最上地域の遺構と遺物の特色等についてまとめておく。

遺構について

最上地域での中期前半の大規模集落では、楕円形・長方形の平面形となる大型住居跡を中心とした集落が形成される。その他、円形の小・中型の住居も同じ集落内部に認められる。この様相は、山形県内の他地域でも共通する。

中川原C遺跡では、4本柱構成となる建物跡が確認されたが、これらは居住施設にはならない別の性格の遺構と考えられる。

土坑では、西ノ前遺跡において、貯蔵穴と考えられるフラスコ状土坑が多数検出された。中期前半では、県内他遺跡でも大型のフラスコ状土坑が確認される。

墓と考えられる遺構として、土器埋設遺構があり中川原C遺跡で多数検出されている。他の2遺跡では検出されていないが、土器棺墓は共通的なあり方と考えられる。また、土壙墓も存在するものと思われるが、明確に

各遺跡で検出や報告は行われていない。

多量の遺物が出土する捨て場は、各遺跡とも確認され、遺物数量は数百箱以上に及ぶ。

遺物について

縄文土器は大木 7b 式・8a 式土器を中心に各遺跡から大量に出土し報告されている。大木 7b 式土器は水木田遺跡で優品が多く、重要文化財にも指定されている。東西南部の様相と比較して長胴となる器形が多く、装飾も南部よりは控えめな印象である。他地域からの影響として、水木田遺跡では五領ヶ台系の土器が散見されるが、この傾向は県内全般に見られる傾向である。その他、少量の北陸系の新崎式土器が認められる。水木田遺跡では円筒上層 b 式土器が出土しているが、中期の円筒上層式土器そのものが出土するのは稀である。ただし、中川原

C 遺跡では、円筒上層式土器の影響を受けたと推定される個体も認められる。

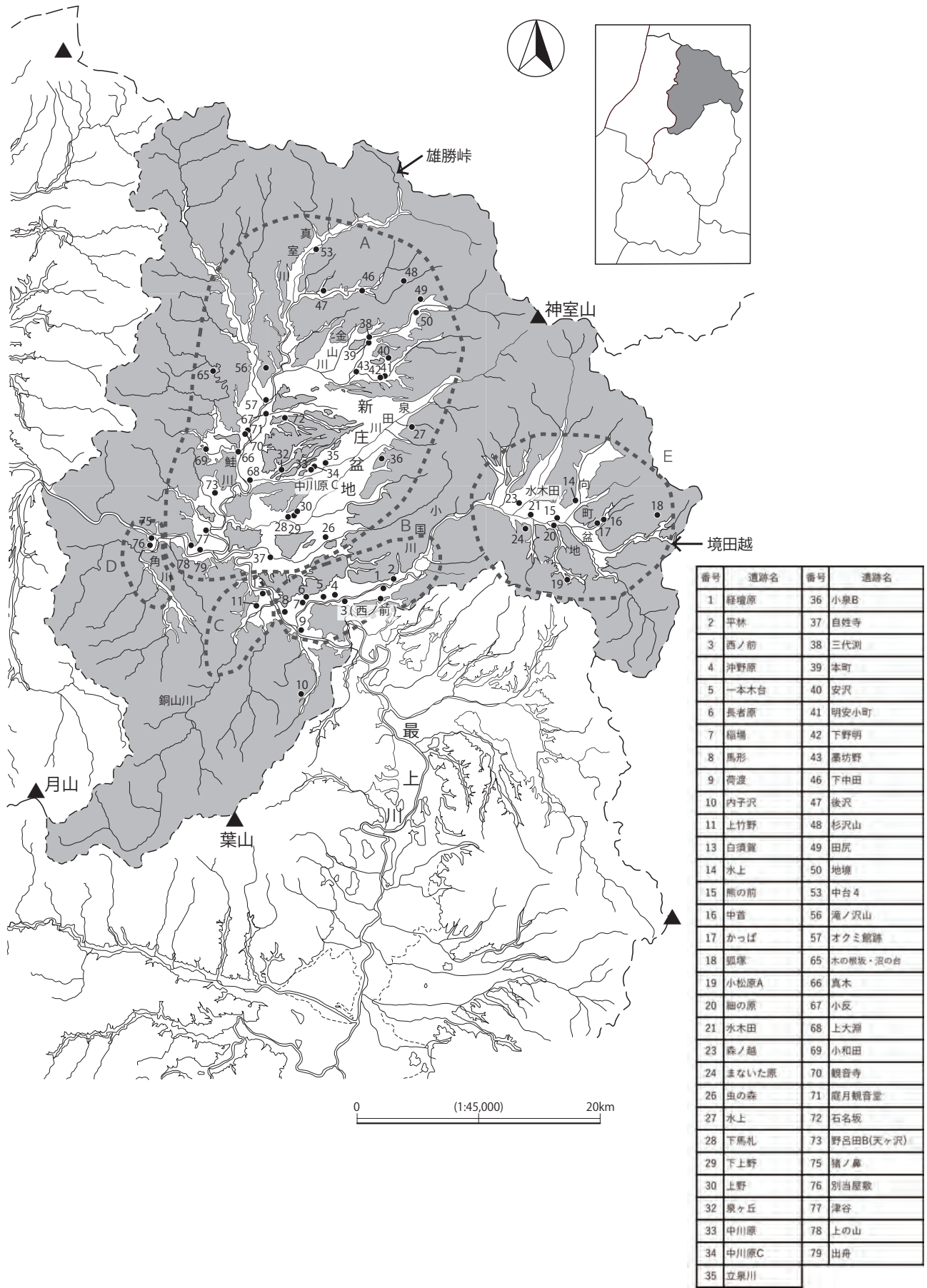
当地域を中心に、中期前半を中心として土偶は西ノ前型式と呼ばれる特徴的な形態の土偶が製作される。いずれも、大規模集落での捨て場を中心として出土が認められる。立像、長脚で板状の胴体、出尻形となる。山形盆地南部や米沢盆地では、三脚土製品や三脚石器など土偶に類する遺物と思われる遺物が発達するが、県北のこの地域は土偶に特化しているように思われる。

土偶以外の土製品のバリエーションは少ない。西ノ前遺跡では管状土製品が確認される。

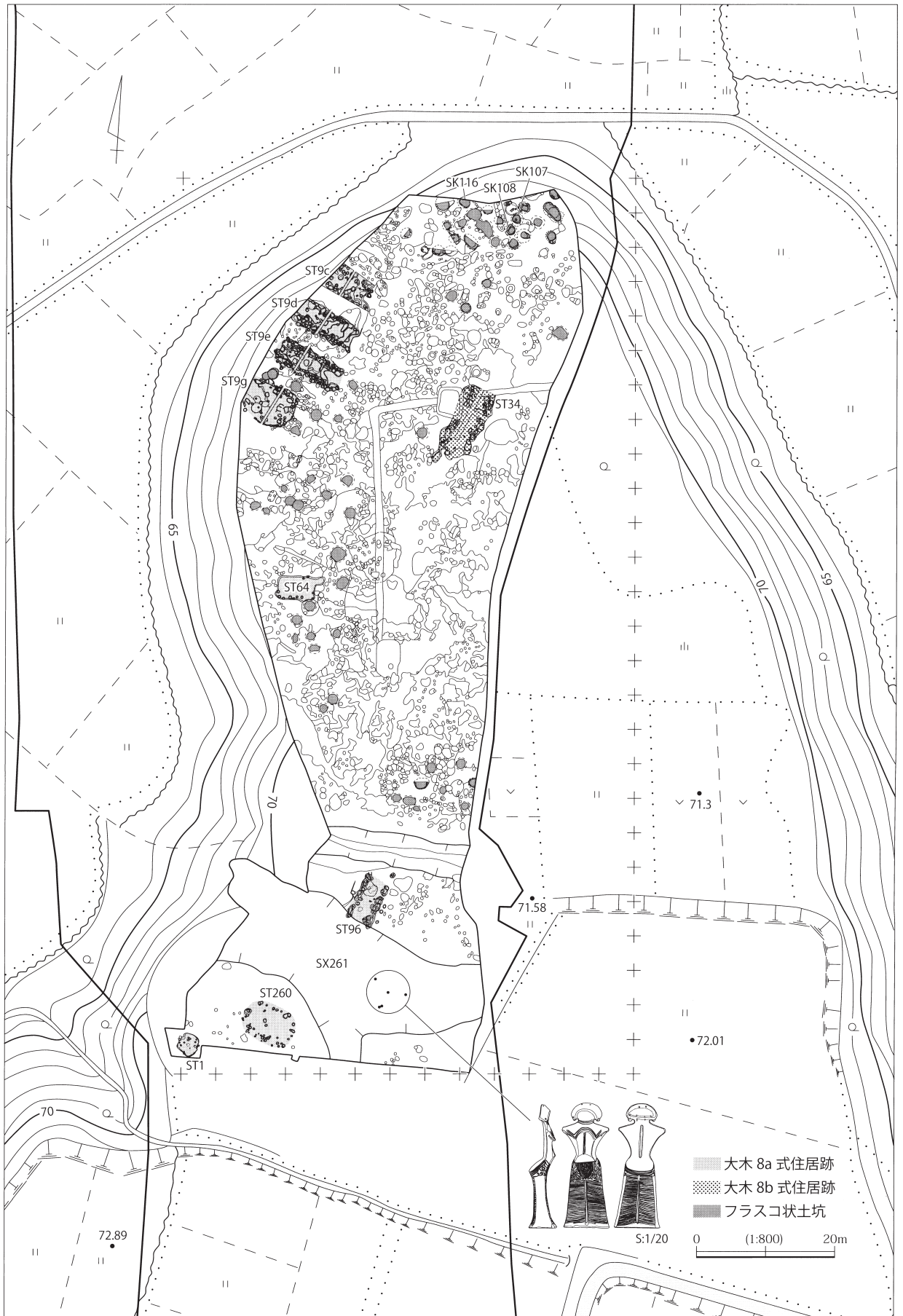
石製品の主なものとして石棒があるが、無頭の個体がほとんどで大型になる。その他、石冠の出土が各遺跡から確認される。

引用・参考文献

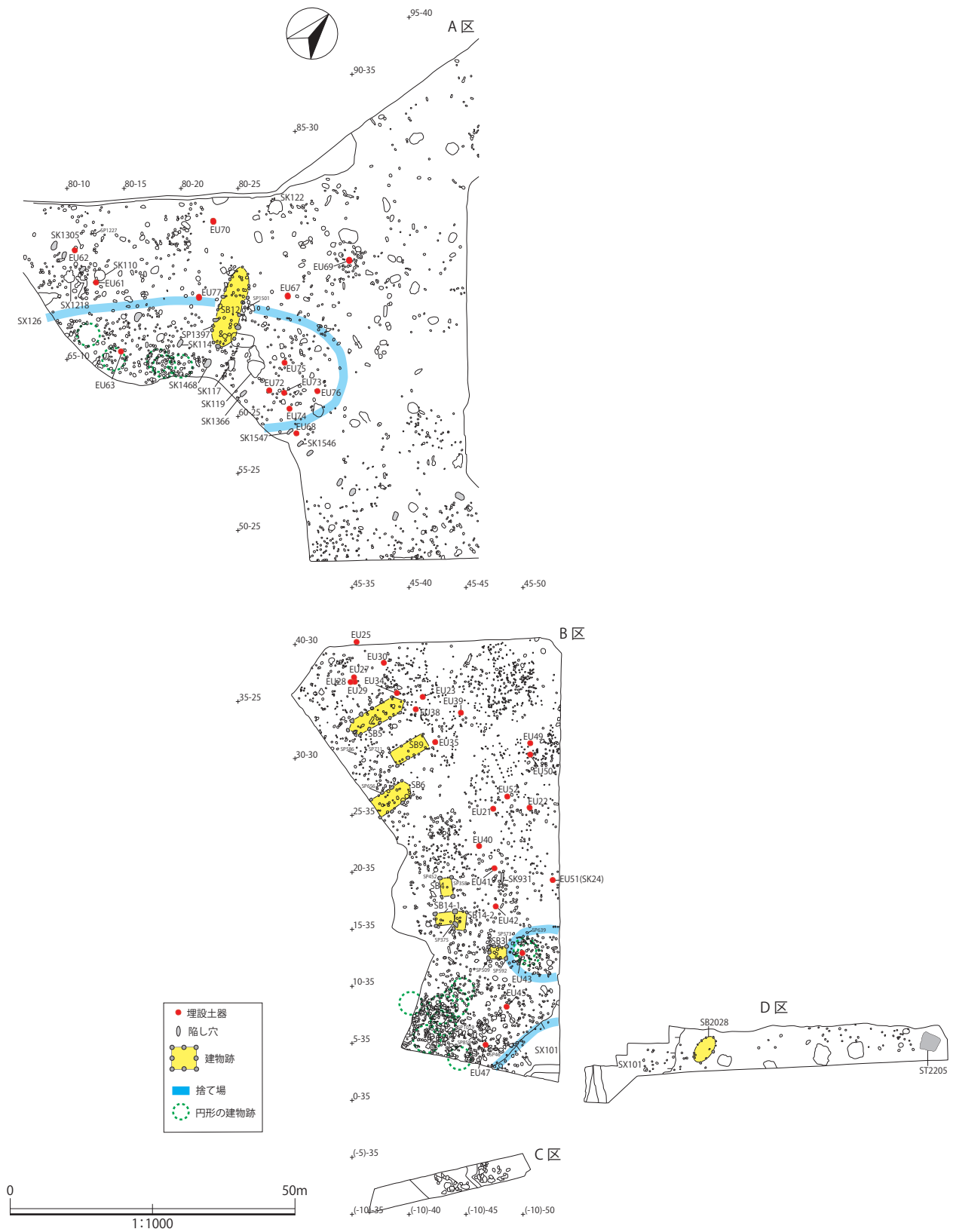
- 阿部明彦 1996 「中期大木式期の様相―西ノ前タイプ土偶の出現と展開―」『土偶シンポジウム 4 長野大会中部高地をとりまく中期の土偶シンポジウム発表要旨』土偶とその情報研究会
- 石井浩幸 2007 『中川原 C 遺跡第 4 次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 163 集
- 阿部明彦・佐々木洋治・佐藤正俊 1984 『水木田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 75 集
- 黒坂雅人 1994 『西ノ前遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 1 集
- 小林圭一 2019 「山形県北東部における縄文時代中期の遺跡動態―西海淵遺跡と西ノ前遺跡を中心として―」『研究紀要』第 11 号 (公財) 山形県埋蔵文化財センター
- 佐竹桂一 2002 『中川原 C 遺跡立泉川遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 98 集
- 渋谷孝雄・齋藤久美子 2015 『第 23 回企画展 重要文化財水木田遺跡展』山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
- 菅原哲文 2017 「最上川中・下流域における縄文時代中期から後期の遺跡分布」『研究紀要』第 9 号 pp.45-74
- 長橋至ほか 2014 『分布調査報告書 (40) 西ノ前遺跡確認調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 218 集
- 渋谷孝雄・伊藤純子 2020 『第 28 回企画展 水木田遺跡と縄文時代中期前半の山形』山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館



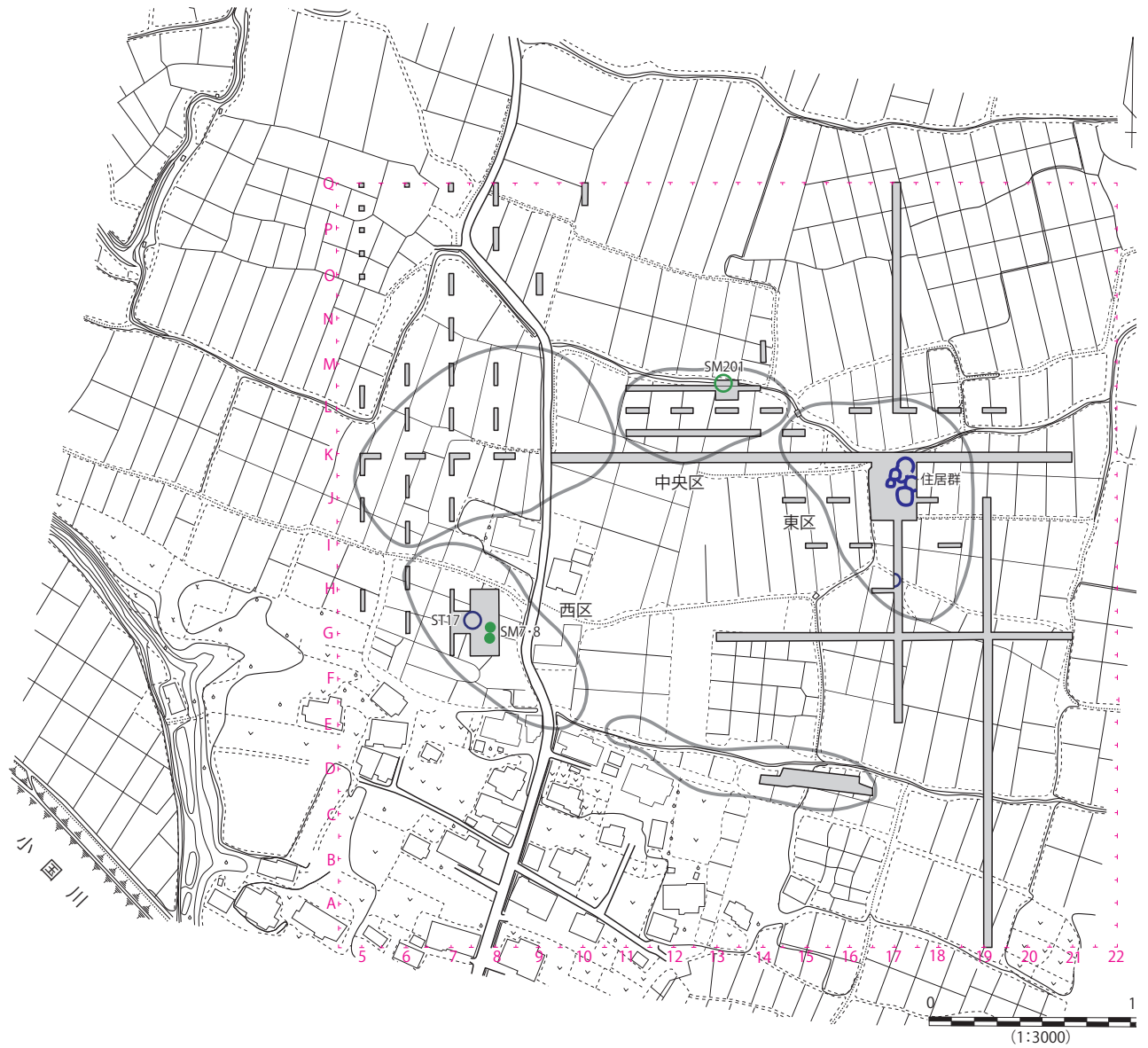
第1図 最上地方の縄文中期前半の遺跡分布図(菅原 2017 より作成)



第2図 西ノ前遺跡遺構配置図 (小林 2019 より)



第3図 中川原C遺跡遺構配置図 (佐竹 2002 より作成)



第4図 水木田遺跡調査区配置図（阿部ほか1984より作成）